
転生して異世界廻り～D.C.?編～

黎白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して異世界廻り～D・C・?編～

【NNコード】

N0262Y

【作者名】

黎白

【あらすじ】

目が覚めたら、知らない空間にいた。

神様を名乗る人に聞くと、死んだから転生しろだつて！？

あ、生きてる時転生したかったし、転生するなりいろいろ世界廻りしますか。

つてことで、テンプレで転生物でいくつか

のアニメ、小説、ゲームの世界を廻ります。

素人なんで、文章

とかおかしいと思います。

それでもいい人は是非読んでください。
ちなみに、ハ

ーレム、原作崩壊、チート、最強要素あります。チート、最強は多分ですけど。
後は他の作品のキャラがでるかもしれません。

更新は不定期になると思います。

感想どんどんお願いします。

俺が転生!?……………やひせなならこりこり廻つてやるーー!(前書き)

一話目投稿。

文章おかしいかもしないけど、許してください。

俺が転生ー？…………やひせなならこわく廻り廻りやるー！

青い天井、青い壁、青い床、人、青い光。

「……。」

普通こいつこいつのは真つ白とかじやないのか？

「なんで全部青いんだよ……。」

あれか？一次創作とかでよくある転生か？まあ、色はおかしいよつな気がするけど。今まで読んだやつは、白とかだったしな。

「おい。」

まあ、転生じゃないとしてもこんな不思議体験はなかなかできないぞ。

「おこーーー！」

「うわーーー！」

声が聞こえたかと思つたら、田の前に女性がいた。顔は中性的だが、胸があるし女性だらう。

「よつやくへやひがついたか。」

「どうやら考え込んでいたよつだ。」

「えつと、誰だ？」

まあ、テンプレなら神様ってことなんだろ？ナビ。ところどころも口調は男っぽいな。

「考えてる通り神様だ。後、男っぽくて悪かったな。」

心を読まれた様だ。口調は別に気にならないでよくね？

「神様って事はやっぱり死んだんですか？」

「ああ。しかし、やけに冷静だな。普通は取り乱したりすると思つんだが。」「

「別に未練は無いしな。それより、俺はどうなるんだ？」

「分かつてゐみたいだから、率直に言つが転生だ。ちなみに特典は三つだ。」「

「三つか……。そいえば、いろいろ読んでる時何個か考えてたから……。」

「一つ目が技能作成『スキルメイク』つてのがほしいんだけど」技能作成『スキルメイク』つてのは、小説読んでたら思いついたので、魔法、武術を初めとしてあととあらゆる技を作るつて物だ。これ使えたなら、漫画の技とか使い放題だし。

「チートだな。まあ、いい。ただし転生時には制限かけるから、転生後に力使って外しておけ。」

また、心読まれたよ。説明の手間省けたしいいけどさ。

「？なんでわざわざ制限をかけるんだ？」

「転生時に体に負担書けないためだよ。お前は、一般人として生活してたから、転生時にあんなチートもつてたら壊れる可能性があるんだよ。」

転生もいろいろ面倒くさいだな。

「わかった。2つ目と3つ目は、転生先で死んだ後他の世界にいきたいのと、転生先で最終的に恋人だった人が心から望んだら、一緒に連れて行きたい。」

出来るか分からぬが、愛した人とは一緒に生きたいし、いろいろな世界にも行つてみたいからな。

「そんな事願つたのお前が初めてだぞ。」

「へえー。結構いると思つたけどな。出来るのか？」

「ああ。そうだ、オマケとしてネギまで出てくるダイオラマ魔法球をつけてやる。ちなみに、この中にお前が居ない限り時間は進まないから。逆に入ると、いくら過ごしても外は時間が進まないから。」

と言つても若干は時間が流れるんだけどな。」

ダイオラマ魔法球つて、確か一時間が1日になるやつか。

「ありがたいけど、何でだ？」

「三つ目の願い叶えるのに楽だからだよ。それにいくつもの世界渡つたら恋人も増えるかもしれないし、記憶保ったまま転生は余り多くの人間に出来ないから、裏技みたいなもんだ。」

「神様の世界で裏技あるんだ。まあ、いいや。ありがとう。

「いえ、俺はどうに転生するんだ？」

「えっと、D・C・?って世界みたいだな。」

D・C・?って確かにPSPでやつたな。でも攻略したの偏ってるしな。

「なあ、特典の死んだ後再転生で行く世界は決まってるのか？」

「いや、二つ目からは自由でいい。」

「なるほど。」

なら、次の世界は気にしないとして。

D・C・?か……。

さくらは救つてあげたいな。確か、一人で何もかも抱え込んで苦しんでたし。

桜のバグは技能作成でなんとかなるからな。

「ありがとうな。」

「気にするな。ああ、そうだ。お前が死んだ理由はどうする？知りたいなら教えるが。」

そいえば、俺が死んだ時の記憶が全くないな。

知れるなら教えて貰つておくか。

気になるしな。

「ああ、教えてくれ。」

「まあ、簡単に言えば救いすぎだ。」

「救いすぎ？」

人を救うなんて、俺以外にもいるし、俺より救つている人だつている。

俺が救つた人なんでほんどいはないはずだ。

「人にはそれぞれ寿命が決まってるんだ。それぞれの寿命が無くなつたら、その人間は死ぬ。それが普通だし、覆す事もできないはずなんだ。

だが、お前はそれを覆す事が出来た。」

「ちょっと待つてくれ。俺は人の命救うなんてしてないぞ。

何度か病気の人を見つけたから、救急車をよんぐらいだ。「

俺は人が車に跳ねられそうなのを救つたみたいな事はしてない。

「それだよ。普通その人達は、誰にも気付かれずに死ぬはずだった。

けど、お前は無意識の内に自分の寿命を削り助けてたんだ。

削つた寿命を『えてな。その結果自分の寿命が無くなり死んだんだ。

』

「一ついいか？それなら俺は転生なんてしないんじゃないのか？他の人と同じ様になると思うんだけど。」

「普通はね。ただそれを見た神様達がコイツのした事は、誉められるべきだし。転生させたら、理不尽な結末とかを変えるんじゃないのか。って事になって、転生させる事になつたんだ。」

「運が良かつたのか？」

「そういう事だ。」

俺がした事が、人の命を救つたのか。役に立てたなら嬉しいな。まあ、自分の寿命削るなんて馬鹿みたいだがな。

「教えてくれて、ありがとうな。」

「ああ、そろそろ転生してもいいぞ。」

「わかった。最後に聞きたいんだけど、神様の名前は？」

「俺か？夕紀だが。なんでそんな事を？」

「せつかく会つたんだから名前は知りたいし、能力使えばまた話せるしな。」

俺がそう言つたら夕紀は少しの間黙つてたんだか急に笑い出した。

「くくく……。そんな事言われたのは初めてだ。お前面白いな。名前は？」

「いまさらかよ。でか、神様なら名前わかるんじゃねえのかよ。」

今まで何度も心読まれてたし、それくらいわかるだろ。

「良いじやねえか。本人から聞きたいんだよ。」

「波柳 蒼影だよ。」

「じゃ蒼影、次の人生楽しめよ。」

「ああ。」

と返事をしたら、足元に穴が……。

「おい、まさか！？」

次の瞬間には俺は落ちていて、聞こえたのは夕紀の笑い声だけだった。

くくく、面白いやつだつたなあ。

「久しぶりに楽しませてもらつたし、更にオマケつけるか。」

いろいろ世界渡りたいみたいだし、

「フラグ体質にハーレム体質をつけるか。これで蒼影が心から愛し、愛された場合、相手はハーレムを認めるつと。

まあ、精神的疲労は多いだろうが、一人選んで悲しませるよりいいだろ。」

蒼影とはまた縁が有りそつだな。

次会う時が楽しみだ。

俺が転生！？……………やひせなならこひこひ廻つてやるーー！（後書き）

書いてわかつたけど、文章書くの時間かかる。

他の小説の作者さん尊敬します。

一話目は近い内に投稿します。

桜の中での出来事（前書き）

一話目投稿！

楽しんでくれたら嬉しいです。

桜の中での出来事

深々と。

桜が舞っていた。

驚くほどやつたつと。

音もなく。

見渡す限りに舞い散る桜の花びら。

それは一面を色づけるようになり、

白で塗りつぶされた世界を彩るようにな。

ただゆつくりと舞い踊っていた。

それはとても綺麗で、

呆れるくらいことでも綺麗で、

一人ぼっちで、

ただ震えることしかできなくて、

寂しくて、

どうしようもなく途方にくれていたボクでさえ、

見惚れてしまいくらい、

綺麗な景色だった。

だから―――――。

だからこれはきっと夢なんだと思つた。

真っ白な夢。

夢のよつね夢。

いつか覚めてしまつ」とがわかつてこるのと、

それでも夢みる」とを夢見てしまつ。

新しい予感に胸を膨らませるよつた、

田舎まじの中でふと涙をこぼしてしまつよつた、

冬の最中に春の訪れを待ち望むよつた、

夢。

差し出された手をぎゅっと握る。

暖かな手、

凍える世界で、

雪の中で、

ぬくもりを確かめるよつて、

わゆつじ。

そんなん――――――。

始まりを告げる夢の始まり――――――。

蒼影 side

桜と雪が一緒にあるひても、やつぱり面白くな。普通じゃあり得ないしな。

やつぱりと雪の姿は子供の姿か。D・C・?に転生なら義之と同じ年だね?、義之の誕生イベントか?

「じつかし、綺麗な桜だな。魔法のおかげで一年中咲いてるから見飽きるか?

まあ、バグを取り除いてかなれば、始まらないな。」

どちらにしても杏やなながが能力を貰つまでは、少し手を加えてるだけにしておくか。

「――やつぱり子供もが――?」

そんな事を考へていると、後ろから声が聞こえたから振り向いてみた。そこには、黒いマントを着た金髪でツインテールの少女がいた。それは、ゲームで何度も見たキャラで俺の好きなキャラ、

芳野 もくら

だつた。

「はじめまして、ボクは芳野 もくらって言つんだ。君の名前は？」

ku·re·si·de

いけない事だつてのはわかつていた。

だけど、桜のバグを取り除けないかと調べてる間に、周りの人は結婚したりして幸せになつていた……。

ボクは寂しくてなつた……。

このままずっと独りなんじゃないかつて……。

そんな考へばかり浮かんでいた……。

悲しかつた……。

だから……、ボクは桜の力を使つてしまつた。

ここ、初音島に戻つて来て願つた。

————ボクにも家族が欲しいです……。

————もしかしたら有つたかも知れない現実を見せてください
……。

そして……、願いが叶い一人の男の子がいた。

嬉しかつた。ボクにも家族が出来たら事が。

でも、同時に怖くなつた。もしこの桜に何かあつたらと思つと。

だけど、ボクはこの子に名前を付けた。

「桜内 義之。」

「……？」

義之君は何かわからなかつたのか、首をかしげた。

「君の名前だよ」

その言葉で理解したのか、義之君は笑顔で答えてくれた。

「うんー。」

そして、義之君と一緒に家に帰ろうとしたらい

「しつかし、綺麗な桜だな。魔法のおかげで一年中咲いてるから見飽きるか？

まあ、バグを取り除いてかなれば、始まらないな。」

声が聞こえた。そして、確かに魔法、バグと聞こえた。

ボクは気になつて、義之君に待つてもらい声がした場所に向かつていつた。

そこには、黒髪の男の子がいた。子どもが居るとほ思わなくてつい

「ここやーー。どうして子どもが！？」

つて言つてしまつた。その男の子は、ボクに気がついたみたいでこつちを見てきた。

このまま何も話さないわけにはいかないから、ボクは名前を聞いてみようとした

「はじめまして、ボクは芳野 とへうつて言つんだ。君の名前は？」

つて聞いてみた。

「僕は、波柳 蒼影だよ。」

その子、蒼影君は答えてくれたけど、その話し方に違和感を感じた。けど、まずはさつきの事が先だと思い、また質問をした。

「さつき、魔法とかバグとか聞こえたけど、君が言つたのかな？」

蒼影 side

「僕は、波柳 蒼影だよ。」

似合わねー。とつたに答えたけど、僕とか似合わぬさわる。というよりも、さつきの聞かれてたのかよ。

これは、誤魔化しきれないかな？

はあー、魔法つてか力の事をバラすのは、バグを取り除く時に言いつもりだつたんだがな。

まあ、さくらが独りで抱え込まないようにするには、丁度いいかも
しれないから、別に良いんだけどや。

しかし、何を話すかな……。

転生者つて事と技能作成『スキルメイク』くらいで、残りは話さなくて大丈夫か。

「ああ、確かに俺だけど。」

口調を急に変えたからか、さくらは少し驚いていたけど、すぐに反応してた。

「口調が変わったけど、それが本当の口調なのかな？」

「ああ。」

「ふーん。で、どうして魔法の事を知ってるの？それにその話し方も見た目とは違って大人っぽいのも知りたいかな。」

別に教えるつもりだから、転生した事、特典として力を貰った事を話した。

「そういう訳で俺はここにいるんだ。

ちなみに、さつき聞いてたかもしけないが、力を使えばこの桜のバグだつて取り除ける。」

さくらは、話の途中からずっと俯いていた。

「そんなの無理だよ……。

ボクだつてずっと研究してきた……。

でも、バグを取り除く方法なんて見つからなかつた！――

さくらは今まで溜めていた物を吐き出すように、叫んだ。

「なら！お前は誰かを頼つたのか？人間なんて一人で出来る事なんてほとんど無いんだよ！――

なのにお前は独りで抱え込んで、誰かを頼らなかつた。

そして、諦めるのか？一人じゃできなかつたからつて…！

お前は人の願いを叶えかつたから桜のバグを取り除こうとしたいたのに、諦めるのか…？」

自分でも何を言つているのか、わからなくなつっていた。

今までではゲームの中だからと思つていたけど、実際に会話をしていると考えた事が消えて、感情のままに喋つていた。

「…………ひつぐ。だつて…………。」

さくらは、泣いていた。俺の言葉が原因だつたのかもしれない。

今まで心に隠してた感情を、あんな言葉が表に出したのかもしれない。

だから……、やつきました決めていたように、さくらの支えになりたい。

「なんなら俺に頼つたらいい。

こんなんだけど、元々は高校生だつたんだ。

寂しくて、辛かつたんだろう？ずっとひとりでいたんだろう？

俺が支えてやるから、俺を頼れ。」

俺の田の前で泣いていたからを抱きしめる。

少しでもかわいが楽になればいいこと願つて。

「辛い時や悲しい時は一緒にやるかい。」

「……本当に?……本当に頼つてもいいの?」

「ああ。だから、思つたり泣じたり。そして、また頑張ればいい。

」

「ううう…………。うわああああああああああん!—」

かくは泣き続けていた。今までの悲しみを吐き出すかのように。

kuwariude

「落ち着いたか?」

ボクの前でそつと語ってくれるのは蒼影君だ。

会つたばかりだったけど、ボクが誰かに語りたかった言葉を言つてくれた男の子。

蒼影君は転生者だって言っていた。普通は信じられないけど、蒼影君の場合は何故か信じる事が出来た。

「うん……。あつがとづ。」

「『仮に』すんな。『眞に』たる支えてやるつゝな。」

蒼影君はもう言つて笑いかけてくれた。
顔が熱くなるのがわかつた。

お兄ちゃんの時以上かもしけない。

お兄ちゃんの時はダメだったけど、今度は……。

だから、蒼影君に感謝を込めて笑顔でお礼を言へ。

「あつがとう」

「

蒼影 side

「あつがとう」

「

そういつたさくらの笑顔はとっても綺麗だった。

この笑顔が見れただけでも良かつた。

正直何言つてるかわからない所もあつたし、恥ずかしがつたけどな。

「ねえ、本当にバグを取り除けるの？」

「ああ。でも、今直ぐには無理だ。」

「これは半分は本当の事だ。

「転生したばかりだから、技能作成を完璧に扱えないの思ひからな。

「どうして?」

「これだけのバグだからな。慎重にしないこと、異常があつたら困るし、まだ力を使いこなせないからな。

「多分7~8年くらいはかかると想ひ。」

「そつか。でも取り除けるんだよね。」

「ああ。」

「ねえ?」

「なんだ?」

「まだ何かあつたか?特に無いよつな気がするが……。」

「蒼影君は転生したんだよね?」

「わうだけど?」

「住む所つてあるのかな?」

「住む所つてあるのかな?」

。 .

ヤバい……。まさか、このまま野宿するしかないのか！？

力を使えば何とか……って、まだ使いこなせないじゃん。

「もし、行く所ないならボクと一緒に来ない？」

「いやいやいや、ありがたいけど俺男だぞ？」

そりゃ原作介入には丁度いいけど、俺は男だし！！

男は基本狼だぞ！！

普通に考えて、さつき会つたばかりの男を招くか！？

普通は会つたばかりなのに自分を頼れとか言わなかっ

つと、いけねえ若干テンションがおかしくなつてた。

冷静に、冷静に。

「だつて行く所ないんだつたら、ボクの家に来た方がいいと思つん
だけど。

ダメかな？（つぬづぬ）」

涙田にて涙づかい。

前世でそんな事された事無いのにビビりやうと……？

「わかつたよ。じゃた世話になるよ。」

「そつか じゃあ義之君の所に行つて、暖かいお家にいこつか」

義之か……。

一応知らない振りしないとな。

「義之君? 誰なんだそれ?」

「えーと、拾い子かな?」
さすがにそれは言えるわけないが。

まあ、行くとしますか。

「なら、早くこひづせ。ずっと一人にするのは可哀想だからな。」

「わうだね」

さくらに連れられたら場所には、D・C・?の原作主人公である桜内 義之がいた。

義之はさくらに気がついたらしく、いつしかつてきた。

「待たせて」「メンね、義之君。」

「うん……。その子は」

「波柳 蒼影君だよ これから仲良しくしてね。」

「うそー。」

義之は顔を「ツチに向けてきた。皿口紹介しつづか。

「俺は波柳 蒼影だ。ようしくな。」

「ほへせ、やへりこ よしおきだす。よのつへ……。」

俺と違つて礼儀正しいな。

「皿口紹介も終わつたし、それから行つつか

「じこですか?」

「ここといいだよ。暖かくて、立派で、」飯がこまかく食べら
れるところなんだよ。」

『ぐるり～～～。』

お腹が鳴る音がしたから、なんとなく隣を見てみる。

「ここへりの『ついた』」飯にした義之のお腹が鳴つたんだうつな。

「うう……。／＼／＼

義之の顔が赤くなつてゐる。俺も同じ立場だったら恥ずかしいしな。

「あはは じゃあ行つたが。」

セベリセベリ握つて手を扭したから、つこつこいつたがり腰に
つかを振り向いていた。

なにがあるのか？

「アハだ いやんと手を繋がないと。」

セベリセベリのトコトコ手をとった。また顔赤くなつてゐる。

そんな事を考へてたら、セベリガレハ手を玉こし始めた。

「なんだ？金ならなこい。」

違つとせ悪つがわざと握つてみる。

「ハヤー…あんなんじやなこよ。」

蒼影脚も手を繋がなこと。

「嫌だ。」

即答する。

当たり前だ。見た目は子供だけビ中身は高校なんだ。そんな事恥ずかしくて出来るかってんだ。

「ダメ……？（ハハハ）」

セベリ。そんな事したら断れねえじゃんかよ。

「わかつたよ。」

さくらの手を取る。周りには人はいないし、居ても見た目は5歳くらいだからいいけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「えへへ～～」 さくらが笑顔一杯になつた。

原作みたいに家族が出来たから嬉しいんだろう。

さくらと義之と共に桜の舞う道を歩いていく。

さくらはとても綺麗な笑顔を浮かべながら歩いてくる。

ちなみに、並び方は俺、さくら、義之の順番だ。

「ねえねえ蒼影君、義之君。

ボクってまだ義之君に名前呼ばれてないよね。」

確かに義之は名前呼んでなかつたな。

「確かに呼んでないな。」

「だよね。ねえ、ボク義之君に名前呼んで欲しいな。」

「えつーー？」

困つててる困つてる。義之はいつも見て助けを求めてくる。無視するけどな。

理由？面白いからに決まってんじゃん。

「えつと……。」「

やくらの視線を浴びて焦りながらも、

「や、やくらさん……。」

「えへへ やつと呼んでくれたね。」「

そんな会話をしながら歩くと、

「あ、着いたよー。」

朝倉と書かれた家があった。

着いた場所、新たな出会い（前書き）

実は、書き始めてすぐにやめたくなつた。

理由は、書き終えた三話を操作ミスで消してしまつた。

でも、感想やお気に入り登録があつたから何とか頑張りました。

つて事で、楽しんでもらえれば嬉しいです。

着いた場所、新たな出会い

「着いたよ、蒼影君、義之君。」

俺の前には、朝倉と書かれた表札のある家があった。

なんつーか、普通の家だな。

「あれがお兄ちゃんの家だよ。みんないい人だから、安心していいよ。」

「うん…。」

心配しているのは義之だけなんだがな。俺はこんな身体だけど、精神的には高校だしな。

ピンポン

やべ、いろいろ考えたらどんどん進んでる。多分音姉や由夢と会うんだし、悪い印象は『えたくないな。

「はーい。」

ぱたぱた

声と共に誰かが走る音がするな。多分由夢かな？

「じー。」

デアの隙間から、小さな女の子……由夢がじらりと物珍しげに見てくる。

「じーーー。」

しかも、わざと擬音を言しながら見てくる。

ヤバいって、ハンパなく可愛いぞ。やつぱり無邪氣だからなのか、可愛いじゃある。

「じーーーー。」

「え、えっと。」

義之困っているな。俺は大丈夫だけど、こんなに見られたら困るわな。
しかし、よくこんなに見れるな。俺が小さい時はじつと見るのが
苦手な子どもだったな。

「じーーーーー。」

「あ、え、あの…。」

義之が俺を見てくる。多分助けが欲しいんだろうけど、今は無視する。

理由？

そっちの方が面白いと思つからに決まってんじやん。

後は、やくらが助けると思……。

無理だな。さくら笑つてゐし、この状況楽しんでるな。

卷之三

「や、やくさん、蒼影……。」

ギブアップみたいだな。

さくらもやう思ったのか、助け舟をだす。

「アーティストの世界」をめぐる話題

- こんばんは

さくらに対して由夢が返事をする。

返事はいいんだけど、
返事する時くらい視線外せはいいのに。

「君の子が義之君だよ。」の前でお詫びした子ね。」

二
六

で、この子は蒼影君、少し事情があるから、一緒に連れてきたんだ

やつぱり可愛いよな。生きてた時弟しかいなかつたから、妹とか

姉とか憧れだつたからな。

「音姫ちゃんもひつひつで。」

せへりが扉の向ひに声をかける。

多分音姉がいるんだろうな。

「…………。」

小さな息と共に扉の奥から女の子が出て来る。

「はい、ねえ。ちゃんとねとひで。」

「はーい。」

そう言ひて一人が出て来る。

由夢は恥ずかしいのか顔が少し赤く可愛いけど、音姉はふすっとしてくる。

結構心にグサツと来るかも。

びつつかな。義之は困り果てて役に立ちやうにならない。まあ頼むつとは思わないけど。

「じゃあ、ボクはお兄ちゃんに話があるから、後は適当にやってね。

」

すべてのヤツ放置しがつた。この空氣なんとかするの面倒だな。

「ちやんと仲良くなるんだよ。義之君、蒼影君。」

えりりが家中に入つていくと、あるのは由夢と音姉の視線だけ。

はあ……、しょうがない。まあは皿口紹介といくか。

「皿口紹介といいつか。

俺は波柳 蒼影。みゆくわな。（一二四七）」

「――――――」

一人の顔が赤いんだけど……、まさかなあ……。

出合つてすぐ惚れる訳ないしな。寒いだけだよな。

「えと、えりりこよしうきです。よろしく。」

俺の後に続いて、義之はペレツと頭を下げ、そして顔を上げてから手を差し伸べた。

「……あはは。」

あははつて。

その手に触れるものはない。

あれは痛いな。手出して取られないのは嫌だよな。手出さなくて良かつた。

「…………」

義之はゆりへつとんの手を戻そつた。

義之の小さな手を、これまた小さな手が包み込んだ。

「えつじ。」

「ゆめ。」

「え?」

「あやべり ゆめ。」

由夢は元気一いつと笑顔を浮かべる。やつぱりいい子だな。

「えつと、なまえ?」

「つよ。」

「あやべり ゆめ。」

名前以外にこの状況で句を書つてんだよ。

由夢は俺の方を向いて、もう一度頷く。

律儀だな。

「よひしへな由夢。」

「…………うそっ。」

少し赤くなつながら答へる。

「よひしへね。お……。」

「「お?」」

おここちやんかな? もじやつなら結構嬉しいな。

「あらえこのむにひやん、よじゆわぬこひやん。」

……ぱりぱり嬉しいな。

しかも、頬を赤くしながらだし若干上皿遺してになつてゐるからな…………。

「（ムツ）おとめ。」

音姉はポツリと一言だけ言い家に入らつとした。

その声は氣を抜いたら麗き逃しそうだった。

「よひしへな。」

「よしかして、ほぐめいわくだった?」

ありやりや、義之がネガティブになつちまつたよ。

「ふーー、そんなことなによ。」

「たけぇ……。」

「おねえちゃん、やこせとおひばりばかりだから、わしづなくて
ここよ。」

田舎はひりと義丈にまたまた笑顔を向ける。

「う、ラブリージュ。」

てかラブルジヨアって意味わかんないんだよな。
使つ場面とかはわかるし、予想は出来るけど。

「田舎がひりに恋つてんだから、しこじいやねよ。」

「うふ……。」

「それにわたしもこやじやないし。
もん。」

歓迎されぬのはやつぱり嬉しここな。

「それにわたしもこやじやないし。

………ここにやさがおこしかやんなになるの。」

嬉しい事眞つてくれるな。

「あつがどうな。（ナードナード）」

「――――」

また由夢が赤くなつたな。

「せつ、それよつはやくなかこほこねり。」

「わづだな、寒いしな。」

由夢に引つ張られ玄関に入ると、家のなかから暖かい空気を感じる。

「あ、えと、おじやまします。」

「んじや、お邪魔しまーす。」

「ちがうよ。」

「え?」

「ただいまだよ。」

.....ああ、そういう事か。

「――はおにこわもんのいえになるの。」

まだ分かつてないみたいだな。

「だから、ただいまだって。」

「え?」

「あつ。」

義之はよひやく分かつたみたいだな。んじや、俺もだな。

「「ただいま。」」

これから俺達はこの家族の一員となる。

シテントントン

「無理だ……。ソレから先が全く思いつかねえ。」

俺が何をして居るかと云ふと、生きていた時からの趣味である時計作りの設計図を作っている。

生きていた時に、なんかのテレビで見てから猛勉強した。

お蔭で学校の勉強はまったくだったな。

三年くらいでだいたいは覚えたから、空き時間はずっとやってたな。

近くに、時計技師がいたから運がよかつたんだよな。生きていた時は、部品作りの関係で簡単な物だけだったが、技能作成『スキルメイク』のお蔭で細かい部品を出せるからな。

生きていた時に作れなかつた、複雑な時計を作りたいんだけど、全く思いつかないんだよな。

他にも友人や家族に贈るのも作りたいから、男女それぞれ作らないといけないしな。

力使って作ればいいって？

それじゃ面白くないし意味ないじやん。部品も設備あれば一から作るんだけどな。

トントン

?誰か来たみたいだな。ちなみに俺は自分の部屋を持つてゐる。原作より部屋数とが多くなつてるみたいだな。

「入つていいぞ。」

「そうえいおにいちゃん、いっしょにあそぼー。」

入ってきたのは、由夢だった。由夢の後ろには、音姉と義之もついてきていた。

「音姉と義之も？」

「うん。」

「ゆめだけだとあぶないから。」

音姉はやつぱりお姉さんなんだな。なんだかんだ言って、由夢を心配してゐるみたいだしな。

「やっぱり優しいんだな、音姉。」（ナデナデ）

「そんな」とない。／／／／

普段冷たいってかクールっぽいから、赤くなつてるとギャップがあつて可愛いよな。

「アラビア語」

なんか由夢の機嫌が悪くなつたか？

「で、由夢なにするんだ？（ナデナデ）」

頭を撫でながら由夢に聞く。一いつつ時は、頭を撫でたら機嫌直るからな。

かくれんぼか……。家中だけたら大丈夫かな?

「なら、俺が鬼をするから隠れな。」

גָּדוֹלָה

由夢と義之が元気に返事をして部屋を出て行く。

「音姉は行かないのか？」

音姉は出ていくつとせずに、俺の方をじっと見ていた。

「いいの？」

「何がだ？」

「鬼になつて。」

ああ、何もせずに鬼をする事についてだらうな。

実際、隠れるより探す方が好きだしな。

「大丈夫だよ、だから音姉も行つていいよ。」

「わかつた。」

音姉も行つたか。まずは設計図を片付けてつと。

この家原作じゃ無いものまであるんだよな。

前なんか、暇つぶしに探索してたら押し入れみたいのあつたから、中に入つてみたらいきなり閉まつたからな。

しかも、外からは簡単に開く癖に、中からじゃ全く開かないから困るんだよな。

中は光が届かなくて真っ暗だし、閉じ込められた時はかなり怖かったな。

まあ、分かりにくい所だし隠れたりはしないだらうか……。

「ううと、そろそろ探しに行くとしますかね。」

まずは、義之を探して音姉か由夢だな。

義之の事だから、リビングにでも居るんじゃないかな?

リビングに行くと、義之が隠れてた。いや、隠れてるんだろうけども、足が丸見えなんだよな。

あれで隠れているつもりなんだろうか。

「よーしゅーわ。」

ビクッ

…………足動いたよ。声に反応したら駄目だろ?。特にかくれんぼで声に反応したら、すぐに見つかるに決まってるから。

「義之みーつけた。」

「もうみつかったの? なんでわかつたの?」

「これは、言わない方がいいよな……。

なんつーか、可哀想だし。

「勘だ、勘。」

「そつか、ねえふたりは？」

「まだ見つかってない。」

「なら、さがしここいりつよ。」

「わかつてゐる。」

義之を見つけて、次は音姉を探すこととした。

「ねえ、どこにいるかな？」

「わかんねえ。まあ適当に探していくしかないだろ。」

「やつだね。」

音姉達は、義之と違つてしまふと隠れるからな。

しかも、体が小さいからこらへん隠れれるし、面倒この上ないな。

家中だからいいんだけど、外だつたらかなり時間かかるつて断言出来るな。

その後、家中を探して三十分。なんとか音姉を見つけて、残りは由夢だけとなつた。

「ゆめ、みつからない。」

「えりこつたんだね。」

大体は探したはずなんだけどな。探してない場所は一つだけなんだ
けど……、まさかなあ……。

残つた探してない場所は、前に俺が入つてみて閉じ込められた場所
だけだ。

「後は俺が探すから、二人は休んでな。」

「でも……。」

「大丈夫だつて。すぐに見つけてくるから。」

「わかつた……。」

「うん……。」

二人は疲れている筈だし、休ませないとな。

それに、もしあの場所なら音姉や義之が行かないためにも、行き方
教えない方がいいしな。

俺は行くとしますか。その場所は周りに対した物は無く、押し入れ
が有るだけだから、余り目立たない。

確か原作には、こんな話なかつたからこの世界だけなんだろうな。

「ひつぐ。」

泣き声か？嫌な予感が当たつたのかな。

由夢が隠れようとして、閉じ込められたのかもしれないな。

あれは、俺でも怖かつたんだし、由夢みたいな小さな女の子だったらもつと怖いよな……。

もし由夢のトラウマになつたら可哀想だな。

「うえええん。」

開けるか……。

「由夢、大丈夫だったか？」

扉を開けると、涙を流して泣いている由夢がいた。

「やうえこ、おここちやん。」

「わかつたよお…………！」

由夢は俺の姿に気付くと、抱きついてきた。

「早く来れなくて、ごメンな、由夢。」

涙を流しながら俺に抱きついてくる由夢の頭を撫でてやる。

少しでも恐怖が無くなればいいと思つて。

「ああ、もうここねやさんとおはなから、おねがやんたち
といつしょによびこごへ。

「や」はこうしたあとで、おはなにこひやんがおねがやんをな
でなでしたから、ついやめしことおもひいたいおはなにこち
やんがわたしなでしてくれた。

そのあと、みんなでかくれんぼをやめじとになつて、わたしがかく
れにいった。

「え? と……、おえやつばこねやんがこたと! わせ……。」

まあ、そうえいおにこひやんがかくれてたばしょこつてやると、
とびらがあこげたからかくれてみた。

ツバタン

「え?」

「ハコのをあると、おこしてたとびらがしまつてこた。

なかはまつべりだつたけび、すぐじやつべこねやんがわいく
れるときもつたら、いわくなかった。

でも、じかんがたつてきたりわくへ、かなしへなりて、なみだが
でてあた。

「ひ、ひっく、ひっく。」

とわらはあかなくて、まつしかりだれもいなくて、しわかった。

「ハラえええええん。」

そつねもつたら、なみだがで、とわらなかつた。

すうじのままなんだ……とおもつてたら、

「田夢、大丈夫か？」

とびらがあいて、ハラえこおにこちやんがいた。

「ハラえこ、おにこわやん…。

」わかつたよ……。

きがついたら、ハラえこおにこちやんにだきついていた。

「早く来れなくハメンな、田夢。」

そうこつてわたしのあたまをなでなでしてくれた。

そつねにおにこちやんのにおこをかいでると、ひとつもあんしんしてねむくなつた。

「ハラえこ、おにこわやん……、だいすめ……。」

「セウエイ、おこいかやん……、だいすわ……。」

「寝たみたいだな。」

わざわざまで泣いていた由夢は、いつの間にか寝ていた。

泣き疲れたんだからな。由夢を背中に乗せて、音姉達の所に行く。

その後、音姉達を落ち着かせて今日は終わりとなつた。

「今日はいろいろ大変だったな……。」

「ンンン

誰だ？こんな時間に誰か来るか？

「セウエイおこいかやん、はこつていい？」

「由夢か？いいぞ」

こんな時間にビーハンしたんだから。いつもなら寝てるんだがさび……。

「セウエイおこいかやん、きょうにこっしょにねでいい？」

「どうしてだ？」

一瞬驚いたが、由夢を驚かせないよひさんとが表面上はそれ下さい
だな……。

「うわこから……。」

なるほど、今日の事か……。あれは俺も悪かったし、少しくらい
いか。

「いいや、うわおいで。」

「うさー。」

由夢は笑顔を浮かべて、うわしゃつられた。

由夢は、ベッドに入ると抱きついてきた。だから、また頭を撫でて
やる。

「あつがとう、うわおいでやん。」

「うわこたしあつ。じやあ、寝るぞ由夢。」

「おやすみ、うわこおいでやん。」

「おやすみ、由夢。」

その後は、由夢が眠りにつくまで頭を撫で続けたから、腕が痛かつ
たがたまにはこんなのも悪くない。

そう思いながら、俺も眠りについた。

次の日、朝起きたらわくらと音姉、特にわくらの機嫌が悪くて、直すのに時間がかかったのは余談だ。

音姉と秘密の共有（前書き）

四話目なんとか完成しました。

音姉と秘密の共有

俺は今、音姉を探している。

前みたいな遊びではなく、真面目にじだ。

なんで音姉を探しているのかって、由姫さんが亡くなつたからだ。

由姫さんは一度だけ会つた事がある。その時は元気だつたし、まだ時間があると思った。

だから、油断していた。

（回想）

俺はお見舞いに行つた後、少ししてから初めて技能作成『スキルメイク』の力を使つた。

まずは、力を使つた時の代償を無くすために、代償軽減『オールワント』、そして作った力を忘れないように、技能目録『スキルブック』を作つた。

制限が有ることはわかつてたけど、二つとも最初に必要だと思つたから一つずつではなく同時に作つた。
作り終えたら、体中に激痛に襲れ、意識を手放した。

俺が目覚めた時、自分の部屋のベッドで寝ていた。起きて一番に不思議に思つたのが家の中の空気がおかしい事だつた。

暗く、悲しみで包まれてた。俺は嫌な予感がして、部屋を出るためにベッドから起きた。

その時さくらが入ってきた。田は赤くなつていて、俺を見た途端涙を浮かべた。

「蒼影君つー！」

「つと。」

さくらが急に抱きついてきたから、体制を崩しそうだったけど、何とか持ちこたえた。

「良かつたつ。蒼影君が……生きてて。」

「生きてて？俺はどの位寝てたんだ？」

「さくら、なにがあつたか教えてくれないか？」

「うん……。実は音姉ちゃん達が蒼影君を見つけたんだ。蒼影君が倒れてるのを見つけて、ボクを呼んでくれたんだ。」

「音姉達が……。」

「うん……。だから部屋まで運んだんだよ。でも一週間も起きないし、それに……。」

「何かあつたのか……？」

「音姫ひかりさんと由夢みづきさんのお母さんが……。」

由姫さんが……。まさか……。

「由姫さんがどうしたんだ?」

「七くくなつたんだ……。」

「由姫さんが……死んだ?」

信じれなかつた……この前まで元気だったのに……。

「…………。ボク出でおくね。お兄ちゃんの手伝いしないといけない
し。」

「ああ……。」

俺を気遣ってくれたんだろう。

俺の中にあるのは、悲しみ、無力感、罪悪感、そして自分に対する怒りだつた。

色々な感情で押し潰されそうになつた。

俺が一週間も眠つてる間に、由姫さんが死んだ事に対する悲しみ、貢つた力を使いこなせなかつた無力感、救えたかもしれないのに救えなかつた事に対する罪悪感。

そして、大切な時に眠つてなんかないで、何も出来なかつた事に対する怒り。

もし同時にしなかつたら、ここまで眠らなかつたかもしれないの。」

「「めんなさい……。」

俺はいつの間にか、泣いてしまつた。

泣きながら、俺は決心した。

由姫さんの分まで音姉、由夢を幸せにする。もう後悔しないよつて元気一杯生きて行こうと。

前に進んで行こうと思つた。

それからは大変だつた。由夢はもちろん義之も悲しんでたし、慰めないといけなかつた。

当たり前だけど、みんな悲しんでいた。それに、葬式の準備もあつたからみんな忙しかつたみたいだから、必然的に由夢、義之の相手は俺だつた。

ただ音姉だけは泣いていなかつた。

いや、俺達の前ではかもな……。

感情を溜め込んで壊れないかと思つたけど、見た感じは大丈夫そうだから安心してた。

葬式の時には感情も吐き出すだろ？ そんな事を考えていた。

そして、葬式の日。

聞こえるのは、周りの人の声、由夢の泣き声だった。

音姉はまつたく泣いていなかつた。でも、それは表面上だけだ。俺は、音姉がかなり悲しんでるのがわかつていたから、音姉が心配だつた。

そして心配していた事が起つた。

音姉が居なくなつていた。

（回想 end）

「はあはあ、つたくどにいるんだよ、音姉は。」

技能作成を使えば力を作れただけど、まだ使いこなせてないから、代償軽減がちゃんと発動するわからなかつた。

だから、自然と探す方法は自力だつた。

「ヤバいな。日も暮れてきたし、音姉が病気にもなつたら嫌だし。

」

さつきから島中を走り、時間はどんどん過ぎていき辺りは少し暗くなつていた。

病気になつたら由夢達も心配するしな。

公園に着くとベンチに見慣れた人影があった。

「はあはあ、ここにいたか……。」

「…………。」

音姉は俯いていて、その姿は泣いてるよつにも見えた。

「はあはあ、よしつと。」

息を整えてから、音姉の座っているベンチに歩いていく。

「音姉、こんな所にいたのか。」

「…………。」

無言。聞こえていないう事はないだろうし、放つておこて欲しいんだひづ。

「おーい、音姉？聞こえてる？」

だとしても、放つておかないけどね。音姉が悲しんでるのはわかるから、慰めてあげたいし。

「…………聞こえてるよ。」

ぽつりと呟いた。

「聞こえてたようだな。なら、返事してくれよ。」

「…………。」

まだんまりか。

「随心配してたんだぞ。」

ベンチに座つてゐる姉の隣に俺も座る。

「いいの……。」

「いいわけない。誰とも会話をしないし、『』飯も食べてない。

由夢や義之も心配してたし、そのままじや病気になるぞ。」

「いいの。私病気になるの。」

「病気になつたら、辛いし苦しいぞ。」

純一ちゃんややべり、由夢や義之ももつと心配するぞ。」

「いいの……みんな、わかつてないんだよ……みんな、お母さんが
いなくとも平氣なんだよ……悲しくなんかないんだよ……。」

音姉が大きな声で叫ぶ。

つい大声を出して怒鳴りてしまふ。

「平氣なわけつ、あるか！悲しくないわけないだろ。」

「…………。知らない……。そのまま病気になつてお母さんの所に行くの……。」

「音姉が病気になつたら、死んでしまつたら、血がついたらここんだよ。」

「…………。」

「そんなの俺は嫌だぞ。」

「…………。」

「それによ、そんな事になつて由姫さんは喜ぶと思つへ。」

「つえ？」

「俺達がさ、「のままあつと悲しんだままだつたり、音姉が病気や死んでりしたら、由姫さんは悲しむと思つべ。」

「…………つん。」

「音姉は由姫さんを悲しませたい？」

「いやだ……。おかあさんをかなしませたくない。」

「でも、ひとつはいやだよ……。」

「はあ、音姉は一人じゃなこだわ。純一さんやわへり、由姫や義久もこる。」

俺だつてこる。」

「…………。」

「なられ……。」

俺は力の一ツ空間箱《ボックス》を使い、一つの時計を出す。

これは、技能作成を使い氣絶し、起きた時に合ったものだ。前世で生きていた時に、作った時計で自信作だった。

「つえー?」

驚いてる驚いてる。まあ、何もない所から時計が出たら驚いて当然か。

「…………きれい。」

「今はこれしかないけど、他のを作るからその時は由夢達と一緒にあげるよ。」

「本当に?」

「ああ、それを楽しみにしてよ。楽しみがあつたら、少しほは楽になるだらつか。」

「うん。」

「後は、さつきの見ただろ?俺は魔法が使えるんだ。」

「魔法……。」

「だから人には黙つててな。約束だ。」

音姉の前に立つて、音姉に言つ。

「知つてるよ。」

「え？」

音姉は、急に笑顔になつた。今までの暗さが嘘みたいだ。

てか、笑顔初めてじやないか？

「あのね、それを、いつしんどつたといつていつんだよ。」

「一心同体？」

なんか原作であつたような。

「うん！」

音姉は手から大福を出してきた。

なぜに大福？

「私はね、せいぎのまほつかいなんだよ。」

子どもらしくて可愛いな。

「「れ、れみにあげるよ。」

「あ、あ、あ、ありがと。」

音姉に貰つた大福を口に運ぶ。

「つまこな。」

「でしょ。」

うん、つまこんだけビ運動したあとだから喉が渴くな。

なんか飲みたい。

「これ、じつはいつぱんだ？」

「きみと同じ魔法だよ。」

音姉が笑顔を浮かべる。よく笑つよつになつてくれたな。嬉しい限りだ。

「魔法ね。」

「これもきみと同じで、いつたらダメだよ。私の秘密何だから。」

「わかったよ。」

子どもだけ、じつかりしてゐるな。

「あのね、せこぎのままつかにはちからをかくすものなんだよ。」

前言撤回、理由は子どもだ。

正義の魔法使いは力を隠すもの……か。

俺は違うかな。

「俺は違うと思うぞ。」

「どうして?」

「正義の魔法使いなら、大切な人を助ける為なら力を使わないと。それに正義の魔法使いだって人間だからな、隠すだけじゃなく人を頼らないとダメだぜ。」

一人で抱えたら壊れてしまうしな。

その為なら時にはバラさないと云ふけどな。」

俺だけかもしれないけどな。それに音姉が言つてると云ふのは違うと思うけど、さくらみたに一人で抱え込まれてもいけないし。

「……。そうだね。ならみんなに教えるそのときまでは一人だけの秘密。」

「わかったよ。秘密の共有な。」

「えへへ、ならゆびきりしよう。」

「わかったよ。」

「ゆーびきーりげーんまーん、うつそひいたら、はりせんばんのー
ます。

ゆびきつた。」

音姉は笑顔を浮かべて、楽しそうに絡めた指を振りながら歌つた。

そんな音姉を見ながら、必死に探して良かつたと思つた。

そして、俺も一緒に笑顔を浮かべた。

音姉 side

お母さんが死んで悲しかつた。

お母さんに会えないなら、病気になつてお母さんに会いに行きたか
つた。

だから、公園のベンチに一人で座つてた。なにかをするんじやなく、
ただ座るだけ。

ずっと座つてたら蒼影君が來た。

蒼影君はさくらさんが義之君と一緒に連れてきた子で、会つたとき
から嫌いではなかつた。

蒼影君がなにか話し掛けてくれる。だけど、わいびりでもよかつたから無視してた。

でも、蒼影君に言わされてから、『気がついた。

おじこちゃんやわくらせと、由夢や義之君にまた私同じ気持ちにさせたくない。

もし、私が死んでしまってもお母さんは喜ばず悲しむだけだって。

でも一人は嫌だつた。

「はあ、音姉は一人じゃないだろ。純一さんやわくら、由夢や義之もいる。

俺だつてこる。」

蒼影君に言われて嬉しかった。私を思ってくれてるってわかったから。

そして、蒼影君がまほづかいだつて知つた。

だから、私も蒼影君に教えて、秘密の共有をした。

私はこれから、由夢ちゃんや義之君、蒼影君のお姉さんとして頑張つて行こうつ決めた。

でも、蒼影君にはお姉さんだけじゃ嫌だつて思つた。

何でかな？

蒼影 side

「じゃ、音姉帰るの？」

「うさ。」

「あいつ。これから、ちやんと俺の名前呼んでくれよ。」

「え？」

「今まで呼んでくれなかつたからね。」

そう、音姉は俺の名前を呼んでくれてなかつたから、この機会に呼んで貰おうと思つた。

「んー。なら、弟くん。」

「ダメ、ちやんとが前で。」

原作と同じは嫌だ。弟くんとか恥ずかしい。

「なら影くん。」

「まあ、それなら……。」

「じゃ、帰る。影くん。」

「ああ。」

音姉が元気になつてよかつた。なんだかこれから大変な気がするけど。

「つなー。」

なにがあつたかって言いつと、止まつてた俺の所に来た音姉が、腕に抱きついてきた。

「えへへ。」

そして、笑いながら俺を引っ張つていった。

本当に大変な事になりそつだが、面白くもなりそつだからいいか。

帰つてきた俺と音姉を待つっていたのは、純一さん達だつた。

皆こっちを見て安心してたみたいだけど、俺の腕に抱きつく音姉を見て、さくらと由夢が怖くなつた。

だつて、なんか見えるもん。オーラ?なんか黒い物が見え、寒気もしてきた。

音姉が腕から離れると大人達がやつてきた。

「「音姫（ちやん）。」」

純一さんとさくら、その後に由夢と義之がやつてきて、音姉は壁に謝っていた。今まで心配かけたかららしい。

由夢や義之とも仲良くなつてゐみたいだな。

そんな事を考へてると純一さんがやつてきた。

「蒼影君、ありがとうな。」

「なにがですか？」

「音姫の事だよ。君が音姫を助けてくれたんだろ。ひ

さくらの時もだが、本当にありがとう。」

「俺がやりたかったから、やつただけです。音姉やさくらとは一人で抱え込まれたくなかったから。」

「どうりでもいいんだよ。ありがとうな。」

純一さんはお礼を言つて、戻ついた。

お礼を言われるのは気持ちいいな。

「みんな、家に入ろつよ。」

さくらの声で、皆家に入つていった。そして、俺が入るうとした
桜が舞つていた。

さうして仲良くなつた俺達を祝福するかのように綺麗だつた。

音姉と秘密の共有（後書き）

なんか今回の話は書いてよく分からなくなつた。
楽しんでもらえれば嬉しいですけどね。

街探索と新たな友人（前書き）

なんとか完成。

今回は別作品とオリキャラとの出合いであります。

少し長め。

街探索と新たな友人

由姫さんが死んでから、しばらくがたった。音姉は、由夢や義之とも再び仲良くなり、よく笑うようになった。

だけど……。それ以降、音姉を初めとして、さくらや由夢が俺に対して、よく引つ付いてくるようになっていた。

しかも、たまに顔を赤くしながら抱きついてきたりする。

多分だけど、フラグが建つてゐるよな。

まさか、いきなりつてか三人も俺を好きになってくれるなんてな……。

今は、このままでも良いんだけど、大きくなつたらハッキリしないといけないんだよな。

普通はありえないけど、出来る事ならみんなを幸せにしたいな……。

一人を選んで悲しませるなら、全員を選びたいんだけど……、世界的にも無理かもしねないな。

それに、そのためには三人……このままだと増えそうだが……、まあ三人を説得しないといけない。

もしダメならどうするか……。一人を選ぶなんて出来そうもないからな。

……、まあ今は今を楽しむとするか。

「影碧、どうにいくの？」

一人でゆっくりしようと思つたんだけどな……。

音姉一人来たら由夢も来るだろ？し、説得したら一人で行つても文句言わないよな？

「少し、外に行こうと思つて。」

「私も一緒にいい？」

予想通りだな。

「えっと、今日は俺一人で行こうかなって思つたんだけど……。」

「そつかあ、なら気をつけてね。」

思つたよりも簡単に許してくれたな。もう少し時間かかると思つたんだけどな。

まあいいや、まあどうに行くとしますかなつと。

「本屋とかいいかもな。」

本屋に行つたら、料理本もあるだろ？から料理のレパートリーを増やすにもちょうどいいな。

今は、和食と簡単な洋食しか作れないし、中華系やフレンチもいい

な。

いろいろな種類を作れたら、料理もワンパターンにならなくていいし、作つて楽しいしな。

そんなことを考えながら歩いていると、後ろから走る足音と声が聞こえてきた。

「…………なんだこの音。」

ハンパなく嫌な予感がするんだが……。

「どいてくれなのさー。」

嫌な予感がどんどん大きくなるんだけど。声は後ろから聞こえたよな……、つてことは……。

恐る恐る後ろを振り向くと、緑色の髪でカメラを持った女の子が走つてきた。

ヤバい、ぶつかつ。

ツドン

「いっつづ。」

「いたいのさー。」

「悪い、大丈夫か？」

変な事を考えずに避けとけば良かつたよ。

「うふ、大丈夫なのさ。」

「……、」の声や話しかけてもしかして……。

「ああ——！」

「うお、こきなりなんなんだよ。」

「特ダネがあ。」

特ダネ？それってこのオモチャか？

「オモチャが特ダネなのか？」

「えつー？……あはは、本当なのさ。ただのオモチャだったのさ。」

「あーっと、一体何をしてたんだ？」

「見た」とのない物が有ったから、追つてきたのさー。」

「やうなのか……、まあ頑張れよ。」

嫌な予感MAXだ。もし予想通りなら、好きなキャラだけじゃ。絶対に振り回されるから、ひとつと逃げますか。

「まつのセー・名前を教えて欲しいのセー。」

「波柳 蒼影だけど。」

なんでも言つたんだよ！？ 言つたら絶対に巻き込まれるだろ。

これは多分、振り回されるな。

いや、面白いだらうし、いいんだがさあ、疲れるじやん？

疲れるのはちよつとなあ、自分からひくんなら良いんだけれど。

「ナツミー、ナシミ・キヤメロンのセーラー服しぐれのセ、リコウ

ツチ。」

「リ、リコウツチ？」

「セツウなのセ、嫌だつたのセ？」

「嫌つていうか、恥ずかしいんだけど。」

「大丈夫なのセ。すぐに慣れるのセ。」

「慣れるつて……。いや、もうこいや。」

やつぱり……。ていうより、おかしくないかー？

どうしてロ・シ・?の世界に暮らすてるチャイムのキャラが居るんだ
よー？

たしかぱすてるチャイムコンターユーだつたか？

いや今せざりでもいい。まさか全員このつて事はないよなあ……。

「今度、ナツミの友達を紹介するのセー。」

「いやいや、俺達会つたばかりだからな！？」

「もう友達だから、大丈夫なのさ。ぼたんやフィルも多分大丈夫な
のさ。」

「一人なんだ。」よかつた。少なじょうだな……。

「違うのさー遠いけどまだいるのさーだから、会えたなら紹介する
や。」

違つたみたいだな。運が良かつたら、ナツミを入れて三人か……。

「そんな事より、リュウウッヂも一緒に特ダネ探しにいくのさー。」

「いやいや、待てって。」

「えー、ノリが悪いのさー。」

なんかムカつくな。はあ、まあ暇だつたしいいか……。

「分かつたよ、一緒に行くつて。」

「そうこなくつちゃなのさーなら、早速いくのさー。」

「はあ、分かつたから、落ち着け。」

一人でゆつくりつて俺には、できないのか……。

まあ、好きなキャラに出会えた事に感謝しつくか。

その後は、ナツミに振り回されっぱなしだった。

たとえば、商店街に行ってカツラのずれてるおっさんを追いかけて、かなり怒られたり。

ナツミって、こんな事探してたっけ？もう少しもとも……、いや原作も変な想像が入つてたのばかりだしまともではないか。

やっぱっこい年じやあ、こんなもんなんか？

つて事は学校に入つたら、原作みたいになるのか？

「どうかしたのさ？」

「いや、なんでもない。」

顔に出てたみたいだな。『氣をつけないといけない』

「あー…あればファイルなのぞー。」

ナツミに振り回されて、いろいろ歩き回つてみると、ナツミが言ひ出した。

心の準備が出来てないんだけどー…？

ただでさえ、原作キャラと会つのはなんか緊張するのに、好きなキャラだからなあ。

「ヤッホーなのさ、ファイル。」

ナツミの見ている方を向くと、大量の荷物を持った女の子がいた。

後ろ姿からも分かるけど、やつぱりぱすてるチャイムのファイルだった。

ていうより、あんなに荷物持つて大丈夫か……って、ヤバい！
ナツミが声かけたからか、バランスを崩してんだけど！

「…いってーな。今日で一回目かよ。」

本当は、転けないように支えようつと思つたんだけど、荷物が重過ぎて下敷きになつちました。

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫だから、早く退いてくれ。」

「うー、ごめん。」

別に無理矢理退かせれるんだけど、乱暴はしたくないしな。

しかも、重いってよりも上に乗られるのは恥ずかしいな。

「ファイルにリュウッチ、大丈夫なのさ？」

「ボクは大丈夫だけど……。この人は？」

「リュウッチの事なのさ？」

「うん。」

「いて。ああ、俺は波柳 蒼影だ、よろしく。」

「うふ、ボクはフィル。フィル・イハートだよ。」

それにしても多い荷物だな。

せつかくだし、家まで運ぶのを手伝つとするか？

「あのれ、今から帰る所？」

正直初対面の相手にこんな事聞くつて、なんか変だな。

「へ、うん。そうだよ。」

「ならや、この荷物運ぶの手伝おうか？また転けても危ないしや。」

「え？で、でも……。」

やつぱり初対面の相手には頼り辛いか？

「また転けるかもしねいぞ。」

「うう……。」

「コウウッチに任せとおけばこいのやー。」

「じゃあ、お願ひしてもいいかな？」

結構すんなりといったな。ナツミが居たからか?

「了解。」

ファイル side

「はあー、重いなあ。」

今日、まとめて必要な物を買つたんだけビ、つい買すぎるたりやつたなあ。

一人で持たないといけないけど、重くて少しよろけながらも運んでいく。

こんな時誰か、運ぶの手伝ってくれる人が居たらいいのになあ。

「ふう、疲れたなあ。」

運んでくれる人って言つても、仲の良い友達には男の子いないし、ナツミやっぱさんは重くて持てないだろ? こんな事頼めないもんなあ。

そんな事を考えながら、荷物を持って歩き出しつづくと……。

「ヤツホーなのさ、ファイル。」

聞いたことのある声が後ろから聞こえ、後ろを振り向こうとするといつまでも持っていた荷物の重さでバランスを崩してしまった。

倒れそうになつた時、ナツミの隣にいた人がこっちは走つてくる姿だつた。

そして、倒れた時に来る衝撃に備えてたんだけ、いつまでたつても衝撃が来なかつた。

その代わり……。

「……いつてーな。今日で一回目かよ。」

ボクの下からそんな事が聞こえた。

さつきこっちに走つてきた人だつた。手にはボクの荷物を持つてし、ボクを支えようしてくれたのかな?

「ねえ、大丈夫?」

「大丈夫だから、早く退いてくれ。」

「「」「ごめん。」

声をかけたら、そんな事を言われた。で、その時まだボクが上に乗つたままだつて気ずいた。

「フィルにリュウッヂ、大丈夫なのさ?」

「ボクは大丈夫だけど……。この人は?」

「リュウッヂの事なのさ?」

「うん。」

「いてて。ああ、俺は波柳 蒼影だ、よろしく。」

「うん、ボクはフィル。フィル・イハートだよ。」

「ボクを助けてくれた人は、蒼影って言うみたい。」

でも、ナシミのあだ名の付け方はよく分かんないな。

「あのせ、今から帰る所？」

蒼影は、ボクの荷物を持ったまま聞いてきた。

普通なら素直に答えないと思つけど、蒼影からは別に変な事は感じないし答えることにした。

「う、うん。そうだよ。」

「ならさ、この荷物運ぶの手伝おうか？また転げても危ないしさ。」

「え？で、でも……。」

さつきまでは、確かに重いなって思つてたし、誰か手伝ってくれたらつて思つたけど、さすがに初対面の人に頼るのは悪いなって思つたから、断つた。」

「また転げるかもしねないだ。」

「うう……。」

「リュウウチに任せたおばいこのやー。」

「じゃあ、お願ひしてもいいかな?」

確かにまた転けても嫌だし、悪い人じゃなさそうだしお願いする事にした。

「そいえば、ナシミ達はここの中学校に通ってるのか?」

「んーー、今は違うけど、もしかしたらそうなるかも知れないのさー!」

蒼影に荷物を運んでもらしながら、蒼影を見てみる。

蒼影って、会つてまだあまり経つてないけど、優しくてかっこいいし、一緒に学校行つたら楽しそうだなー。

さつきも助けてもらつたし……。

「／＼／＼／＼

「フィルどうかしたのか?」

「え?」

「顔が赤くなつてるからさ。」

「だ、大丈夫だよ。」

「なら、いいけど。」

「うーー、やつちの事を思い出したら恥ずかしくなってきた。

顔も赤いみたいだし、鼓動も速いし、変に思われてないかな？

蒼影 side

なんかフィルの顔が赤くなってるけど、大丈夫なのか？

原作とかナツミやぼたんを先にやつてて、恋人ルートはほとんびスルーしてたから、こんなフィル見たことないな。

とこつより、ナツミやぼたんがヒロインじゃなかつたのは嫌だつたな。

て、そんな事よりなんどこの世界に居るんだろう？

この世界には冒険者とかないから、性格や容姿が同じだけなんだぞれあ。

でも、ナツミにフィル、ぼたんだる？

結構個性的なキャラばかりじゃねえか？

今んところは、風見学園には来ないっぽいんだけど、なんとなく来

そうな予感がするんだよな。

具体的には原作前、何となくだけじゃ、多分当たるんじゃないかな?

「いいだよ。」

ん、考え事してる間に着いたみたいだな。じゃあ、荷物を置いてつと。

「じゃあ、ここに置ことから。」

「うふ、ありがとう蒼影。」

「じゃあ、次にここのセー。またなのせ、ファイル。」

ナシ//がこきなり腕を引つ張つてくる。せつかままで静かだったのにな。

「じゃあな、ファイル。」

「うふ、また会おうね、蒼影。」

「てか、引つ張るなってナシ//。」

「いいからはやく次に行くのセー。」

「わかったか、ひ。」

なんか怒ってねえか?途中で中断されたからってのは、ナシ//からファイルに声をかけたわけだし、ありえないと思つんだけど。

「次はナツリのセーフティーウッチは行きたい所どりがあるのセーフィー。」

「そいえば本屋行きたいな。ナツリのオススメとかどつかあるか?」

「んーー、そうなの? いい場所があつたの? きっとリュウウッチも気に入るのや。」

「なら、案内お願ひしてもいいか?」

「わかつたのセー。」

いつの間にか機嫌が良くなつてゐる。一体何だつたんだ?

「あら、ナツリじゃない、こんな所でどうしたの?」

この声つて……。まさかなあ、さすがに一田で三人はねえ?

「ぼたんなの? ぼたんこどもしたの?」

「私? 私はペンとかを買ひにね。それより、その人はだれかしら?」

「紹介するの? リュウウッチなの?」

「ナツリ? あだ名で言つても紹介にならないと思つたも。」

「俺は、波柳 蒼影だ。よろしく、えつと。」

「ぼたんよ。よろしく波柳。」

「上の名前は?」

わかるんだけど、やっぱり聞いてみたいよな。

「……。」

「なんて？」

「鈴木って書いたの。」

原作でも思つたんだけど、やっぱり嫌いなんだろ？

「なんか、名前の割に普通だよな。」

「しうがないでしょ。名前なんて選びようがないもの。」

確かにその通りだよな。俺は自分で考えてた名前だからまだいい方だな。

「それもやうだな。よろしく、鈴木。」

「ぼたんでいいわよ。」

「なら、俺も名前の前にぼーから。」

「わかったわ。」

「ナツミ達は行くの、またん。」

「ええ、またね。」

「リュウウチ早速次に行くのさー。」

「わかつたから。少し落ち着け。」

「菲尔に比べたら短くすんだな。いいのか、悪いのかよくわかんねえな。」

そして、ナツミに連れて行かれた場所は、少し人通りの少ない場所だった。

「人通りが少ないけど、ここに何があるのか?」

「もちろんあるのさ、さつき言った本屋があるので。」

「へー、こんな場所にあるんだな。」

その会話の後少し歩いていくと、

「あれなのさ。」

ナツミが指差した場所には、結構大きめの本屋があった。

「へー、結構大きな本屋なんだな。期待出来そうだな。」

「あそこなら、いろいろあるのさ。場所が場所だから人は少ないけど、品揃えはいいのさ。」

「なら俺は入るけど、ナツミはまだつまる。」

「んーー、ナツミは次に行くのさ。」

「そつか、ここ教えてくれてありがとな。」

「じりいたしましてなのさ。また一緒に特ダネ探しにこくのや。」

「暇があつたらな。」

「じや、またなのさ。」

それだけ言つと、ナシミは走つていった。

始めつから最後まで元気だつたな。さて、せつかく教えてくれたんだし、早く入るか。

中に入ると、ナシミの畠へとおりかなりな本があつた。

「へー、結構古い本があるんだ。これって!もう発売してないやつじゃん。欲しかったんだよな。」

「本好きなんっすか?」

「まあ、結構読むな。」

「そうなんっすか。」

「で、あなた誰?」

なんか流れで会話してたけど、いつたいだれだ?

後ろを向くと、ショートの髪の女の子がいた。容姿は結構良くて、

親しみやすそうな子だった。

「あたしっすか？あたしは深倉 鈴花っす。父親が店長なんで、こ^レで手伝つてるんっす。」

「そうですか。なら、料理の本どこかりますか？」

「もちろんっす。付いて来るっす。」

なんか個性的な人だな。

「いいじっすよ。えつと。」

「まだ名前いってなかつたですね。波柳 蒼影です。」

「蒼影っすね。後、あたしと年齢同じそつだし、タメ口でいいつすよ。」

「ああ、わかつた。」

「鈴花ー、どうかしたのか？」

「あ、姉さん。お密様っすよ。」

「密？久しぶりだな。」

やつてきたのは、どこか鈴花に似た顔の女人だった。

口調とかは、転生の時に会つた神様に似てるな。

容姿は一言で言えばボーライッシュだな。

「お前が客? 本好きなのか?」

「まあ。」

なんか見た目からしたら、読書とかしねつになないな。

「へー。俺も本は好きなんだ。なんか面白いのあつたら教えてくれてよ。俺も教えてやるから。

あ、そうだ。俺の名前は深倉 恋花だ。よろしくな。タメ口でいいから。」

「あ、波柳 蒼影です…じゃない、まあよろしく。」

「おひ。」

見た目と違つて、読書好きみたいだな。趣味合えばいいな。

「それより、蒼影。それ買つつか?」

「うん。」

「なら、いひなつす。」

結構買つたけど安いな。次からは、ここに来て買つとするか。

「また来てくれます。」

「また近い内に来いよ。なんか面白い本用意しておこしてやるからだ。

」

「わかった。またな、鈴花、恋花ちゃん。」

結構楽しかったな。教えてくれたナシ//にも感謝だな。

街探索と新たな友人（後書き）

感想があるとやつぱつやる気ですね。

次はオリキャラ紹介になります。

オリキヤラ紹介（前書き）

少しだけ訂正しました。

オリキャラ紹介

名字	波柳（はりゅう）
名前	蒼影（そうえい）
年齢	義之達と同じ
趣味	手作りの時計作り
特技	料理、読書、イタズラ、絡繰り作り
性格	自分から何かをして疲れるのはいいけど、巻き込まれるのは面倒と思っている。
時計作りや絡繰り作りが好きで、結構凝っている。絡繰りはロボットと変わらない動きをしたりする。	人の好意にはある程度気付く。が、相手が本気で自分も仲が良かつたりすると、断りたくない。
自分が複数から好意を持たれると思ってはいないが、もしさうなつたら一人を選ぶくらいなら平等に愛したいと思っている。	

普通は無理つて分かつてるが、神様がこつそり付けたオマケのおかげ？で、相手から平等に愛するならハーレムに関してはしょうがないと思われる。

能力

技能作成『スキルメイク』

自分がこんな力欲しいと思った力などを作る事が出来る。

名字 深倉（みくら）

名前 恋花（れんか）

年齢 音姫と同じ

趣味 読書、裁縫、料理

特技 裁縫、料理

性格

性格はボーアイッシュで口調が男っぽく、俺と呼ぶ。

趣味は見た目に反して読書や裁縫、料理とインドア派で結構家庭的。

親のやつている本屋を妹と四人でしている。親のスペックがおかしい事と客がすくないから、仕事はあまりない。

名字 深倉（みくら）

名前 鈴花（りんか）

年齢 蒼影と同じ

趣味

読書、料理、小説書き、運動

特技 料理、掃除、

性格

姉に似てインドア派の部分や家庭的な部分もあるが、運動も好き。

語尾に～っすをつけているなど、個性的。

姉と同じく親のやつている本屋を妹と四人でしている。親のスペックがおかしい事と密がすくないから、仕事はあまりない。

ただ整理などをして暇をつぶしている。

学園では男子は蒼影以外名字で呼んでいる。

蒼影のイタズラによく協力している。

朝の風景（前書き）

なんとか完成。予告なんてあるもんじやないですね。

朝の風景

「蒼影君、おはよーーー。」

「ぐふつ。」

「いつてえ……。人が眠ってるのになんなんだよ……。」

「誰だ……？」

「おはよー、蒼影君。今日気持ちいい朝だよ。」

俺の上に馬乗りに座つてたのはさくらだつた。

さくらは、笑顔を浮かべ言つてきた。可愛い笑顔だが、いきなり起こされ少しムカついたから、いじめてやる。

「いふあい、いふあいよ、そくへいふん。」

いじめてやるつていつても、頬を抓るだけだがな。

まだ外が暗いけど、今何時なんだ?

「おい、さくら。今何時なんだ?」

「えつほ。」

あ、まだ頬抓つたままだつたな。

話してやるか。

「えっと、4時30分だよ。」

「…………。」

「…………。」

「……まあ、まあいいで、何で起しちたんだ？」

「早く田が覚めちやつて。」

「…………。まあいいか。」

時間はあるし、一度寝しょづも余り眠くないし、

「今日は朝飯作るとするか。」

「ほんとっー？」

「ああ。さくらは後で良から、義丈とアイシアを起しちゃう。それべつに起きるからね。」

「わかったよ。朝飯楽しみにしてるからね。」

「」「解。」

ちなみに、今芳野家に住んでこるのは、俺、さくら、義丈とアイシアだ。

なんでアイシアが居るのかっていって、実は少し前に桜のバグを直

したんだ。

技能作成《スキルメイク》を使って新しく、介入《かいにゅう》を作り出し、桜の木の内部から操作したんだ。バッグを取りいた後に、桜に学習能力を付けて、善悪の区別が出来るようにした。

その時に、アイシアと出会った。

アイシアはさくらが桜の木を使った事に対して、怒っていたが俺が説明をして何とか冷静になつた。

その後にアイシアに対し、認識変更《にんしきへんじ》を使い、普通の人にも分かるようにした。

桜の木のバッグを取り除くだけじゃダメだつたしな。

そして、アイシアはさくらの手伝いとして学園で働いている。

その時の事を詳しく？

面倒だし、また今度つて言つことだ。

さてと、回想が長かつたし、そろそろ作り始めるか。

いつもは姉や義之が朝飯を作つてるし、朝飯はだいたい和食になつてるし、今日は洋食でいくか？

ちゅうど、作つてたパンとヨーグルト、ジャムがあるしな。

料理は趣味だし、昨日さくら達に内緒で作つてたんだよな

まあ、手作り自体は前からやつてたんだけど、人に食べさせるには見た目がおかしかったから出さなかつたんだよな。

パンは焼いて、ヨーグルトにはジャムを落とすだけでいいかな？

パンはトースターにセツトしたし、何を作るか……。

「そいえば、パンとか作るとき卵や野菜買つたし、オムレツとサラダ……、後スープ作るか。」

ジュウウッ。

手元のフライパンに油を引き、ミルクといた卵の生地を流しいる。

そのまま手早くかき混ぜ、ある程度膜のようになつたら、ハム、チーズやらの具を入れて、包むように形を整える。

「つうし。」

外見はこんがり、中身はトロトロ、美味しいオムレツを作るには基本だよな。

「スープもそろそろか。」

オムレツやパン、ヨーグルトの準備をしているときに、スープをだいたい完成させたから、後は味付けだけだ。

「んーー。良い匂いがするねー。」

「やべりか。」

といえば、今何時なんだ？

「6時ー？」

いつの間にこんな時間になつたんだ？

音姉や由夢がもう少しで来るな。

「義之君達そろそろ起こしたほうがいいかな？」

「ああ、一人とも起こしてくれ。」

「わかつたよ。」

さてと、料理を持つて行つてと。

スープの量は個人に合わせるとして……、料理と皿が合つてない
が気にしないようにするか。

「おはよっ、蒼影……。」

「起きてきたか、今日は俺が朝飯作つといったから、ひとつと座つと
け。」

「はあー？お前が朝飯をか！？」

「そこまで驚く事かよ。てか、朝飯が洋食なんて俺くらうしか作ら
なくないか？」

音姉やお前は和食多いし。」

「確かにそうだな。でも、蒼影の『』飯つて美味しいから楽しみだよ。」

「

「もう言つてもいいと、ありがたい。

あ、これ置いとこてくれ。」

「了解……つて、これは多すぎだな。」

机と台所を見ると、俺、義之、さくら、アイシア、音姉、由夢。六人分あればいいのに、八人分はある。

「確かに……。どうするかな……。」

「お弁当に出来ないの?」

ん?今は……。

「あ、アイシアさん、さくらさん、おはよひがれこまく。」

やつぱりアイシアだったか。

「アイシアにやべりか。おはよ。」

「おはよひ、義之君、蒼影君。」

「おはよひ、蒼影君気合に入れたね。」

「誰のせいで田が覚めたと思つてんだ。田が覚めなければ、今日は朝飯を作るなんてしなかつたのに。」

「誰かさんのお陰で田が覚めたからな。時間が有つたんだよ。」

「「いやはは。ゴメンね蒼影君。」

「もういいよ。で、アイシアの弁当にするつてのだけど。」

「やうだよ。パンとかサラダなら出来るんじやないかな?」

「弁当か……。実はもう作ったからな。

「それなんだけど、もう作つたんだよな。しかも六人分。もし、音姉が作つてたら、さらに一人分弁当が余るんだよ。」

「蒼影、俺のもあるのか?」

「ああ、だから後で渡すよ。もちろんさくらとアイシアにもな。」

「「ありがとう。」」

「朝飯か……。アイツらに分ける分として持つてくれか。」

「じゃあ、余つたのびりひとつへ。」

「俺が弁当として持つてくれよ。」

「え? でも……。」

「他のヤツに分ければなんとかなるし、杉並か涉なら学食だらうからな。大丈夫だろ。」

ピンポン

「音姉達も来たみたいだな。」

「さくら、一人を呼んできて。」

「わかった。」

「義之とアイシアは運んだり手伝ってくれ。あと少しだからすぐこ終わる。」

「ああ。」

「うん。」

少し張り切り過ぎたな。パンとヨーグルトなんか無くなつたし。

今度食べようと思つてたんだけど、また作らないといけないな。

しかも作り過ぎたから、音姉や由夢がなんて言つたか。

「おまたせ、これで最後だから。」

「おはよー、影君。今日は影君が作ってくれたんだね。」

「おはよー、わざとめす、影兄。影兄、これは作り過ぎだと思つんだ
けど。」

「悪かつたな。ああ、音姉今日弁当作った？」

「ううん、今日は作ってないよ。」

良かつた。朝飯の残りを弁当にするし、三人分の弁当を持って行くのは面倒だからな。

「今日俺が弁当作ったからさ、持つて行つてよ。由夢のも作つたから。」

「影兄の弁当……。影兄が作るなんて珍しいね。明日は雨でも降るんじゃないの？」

少しムカついた。確かに俺は普段料理しないけど、その言い方はねーと思う。

「わかった、由夢は弁当無しな。」

「や、嘘ですからー。」

「つたべ。」

「影君、あつがとうね。」

「早く目が覚めたからついでたよ。」

ちなみに、音姉は俺を影君、義之を義久君と呼び、由夢は俺を影兄、義之を義兄と呼んでいる。

「ちゃんと食べようよ。」

すべての言葉で、食事を始める。

「…………いたさます。」

「(+)のパン美味しー 蒼影君、どうで買ったの?」

「確かにおいしい……、影兄、パンなんてこつ買つたの?」

やつぱり聞かれたか。自分でも市販よりはおいしいと思つてんだけ
ど、やつぱり褒められると嬉しいな。

「手作りだよ。ちなみに、ヨーグルト、ジャムも手作りだから。」

「いつの間に作つたの?」

「俺も見たことないんだけど。」

あー、アイシアやさくら、義之が居ないときによつたし、いてもこ
つそり作つたからなー。

「アイシア達が見てない時?」

「なんで疑問系なの?」

「氣にするな、アイシア。」

「そいえば、そろそろ文化祭だよね。」

「あー、そいやあそうだったな。」

……？原作に文化祭つてあつたつけな？

まあ、世界觀が違つんだし、学園ならあるか。

どつちにしろ原作とか忘れたんだよな……。キャラくらいなら覚えてるけど、意味ないな。

「影君達のクラスはなにをするの？」

「……まだ、決まってなくね。」

「決まってないな。」

クラスの出し物が決まってないから、委員長がキレたような。

これは、原作のクリパに似た流れになりそうだな。

「どうでもいいけど、お姉ちゃん達を困らせなによいにしてよ。」

「困らせるのは義々達三バカだし、俺は関係ないから。」

「つな。杉並達と一緒にするなよ。」

つていつても、俺は杉並達に隠れてやつてるから、バレてないはずだ。

……大丈夫だよな？たまに生徒会に追われるのばれてるから…

……？

「確かに、義之君は杉並君達と一緒にするからね。杉並君はまゆきが当たるから、義之君は私かな……？」

「蒼影は…？」

だから、俺は関係

「影君は、ブラックリストの最重要人物だから、なにかあつたら私とまゆきで当たる事になつてるんだよ。」

な……い。

「はあ！？何だよブラックリスト最重要つて…？」

「影兄、なにしたの？」

「いやいや、俺は杉並に隠れて行動した……し……。

あつ。」

「蒼影君ダメだよ音姫ちゃん達に迷惑掛けたら。」

アイシアにまでいわれたし。

「むぐらとアイシアは学園の仕事大丈夫なのか？」

（（（（「まかした。））））

「むぐら、むぐらさん、アイシアさん。」

「大丈夫だよね、さくら？」

「うん、今日はみんなより少し早いくらいだから。

それより、蒼影君がブラックリスト最重要つて？」

「うぐう。話を戻しやがった。

「えっと、今まで知らなかつたんですけど、影君が杉並君達の影でいろいろしていろつて分かつたんです。

今まで分からなかつたから、まゆきと相談して杉並君達より厄介だといふ事になつたんです。」

「ちよつと待つてくれ。それ誰が……」「杉並君からだよ。一応調べたら、本当みたいだつたよ。」……杉並の野郎……。」

バレないようにも楽しんでたのに、まゆき先輩や音姉が来たら面倒じゃねえか。

「蒼影、お前なにしてんだよ……。」

「義之、お前には言われたくない。」

「何でだよー?」

「三バカじやん。てか、そんな事より音姉、証拠なんて残つてた?」

「杉並君追つてたら、まゆきが見つけたの。それに、今の反応で決定だよ。」

「影兄もなんだ。」

由夢や音姉の視線が痛い。まあ、止めはしないけどな。

暇つぶしにもいいし、楽しいからな。

「…………」「うわやうわや。」「…………」

そんな事考えたら食い終わつたな。

余つた料理を弁当用にするために手を加えるか。

「じゃ、ボク達は行つてくれるよ。蒼影君、お弁当ありがとね」

「行つてくれるね、蒼影君。」

「せへらもアイシアも気をつけとこな。

音姉達はゆつくつしてて。余つたのに手を加えるから。」

「影兄、手伝おつか?」

「大丈夫だから、ゆつくつして。」

いつも音姉には世話をになつてるからな。

そいやあ、由夢のヤツ今では人並みには出来るけど、昔はヤバかつたな。

「……、少しイタズラかぬか……。カラシ、ワサビ、唐辛子どれがいいか。

でも、杉並や涉ならいいが、杏や茜が食つたらヤバいな。

「どうするべきか……。」

「何を幽々ぐるんでるの、影兄。」

「杉並や涉に分ける弁当に何を入れるかだよ。」

あれ？誰と話してんだ？

「なにやつてゐるんですか……。」

由夢が呆れてた。そりゃ自分でも馬鹿みたいだけども。

「いいじゃねえか。由夢はどうしたんだ？」

「影兄の手伝いをしようかなって。」

姉妹にやつくりしてていつたばかつなんだけども。

「もう終わるから大丈夫だよ。」

「やうですか……。」

なんか落ち込んだるな。いつも時は、確か……

「（ナガナガ）」

「い、いきなり何を！？／＼／＼

「別に？」

「そうですか……。」

機嫌良くなつたみたいだな。

「あ、これ弁当な。音姉と義之に渡してきてくれ。」

「あ、はい。」

あー、時計もほとんど完成したからそろそろ渡さないとな。

近い内にでも能力作つておかないと、能力付加出来ないと渡す意味ないしな。

俺つてせつかくの力無駄遣いじゃないか……？

「蒼影、そろそろ行くつてよ。」

「わかつた。」

学校についてたら、まずは杉並に対する対応だろ、文化祭の計画練り直しも必要だし、生徒会……特にまゆき先輩と音姉が大変だよな……。

音姉の話が本当なら、まゆき先輩も杉並より俺優先だろ？

逃げ切れなくね？

「影都一、もう行くよ。」

「今行くつて。」

さて、弁当も持ったし、行くとするか。

弁当に仕掛けた、ロシアンルーレットのイタズラの返心が楽しみだ。

またつたヤツには、まともな物を今度作ってやるか。

朝の風景（後書き）

正直終わり方が思いつかない。

まあ当分終わりそうにならないからいいけど。

オリジナルで文化祭やるつもつだけば、なんか文章とかおかしいような気がする。

タイトルがまったく思いつかない。

「だる……。」

「影君、しつかりしないと。」

音姉が俺に向かって言つけどな……、久しぶりに早起きして朝飯作つたし眠くて眠くて。

「慣れない事するからだよ、影兄。」

「うつせいい、由夢。俺だつてわかってるから。」

毎回こいつなんだよな……、特に朝は何かしたすぐ後はいいんだけど、時間が経つと何かやる気なくなるんだよな。

時計作った後なんか一、二日ぐらいやる気出なかつたからな……。

「音姉、由夢ほつといて大丈夫だよ。蒼影は短いときは一時間くらいで元に戻るし、朝飯作つただけだからそろそろあるんじやない。」

「

「そうだね、影君だもんね。」

「影兄、大丈夫?」

義之と音姉全く心配してないな。特に義之。由夢は原作より優しくなったかな。俺の事心配してくれてるし。

「おひむー、蒼影。」

「うおっ。」

誰かが後ろから抱きついてきたみたいだけど、多分ファイルだな。だつて抱きついてくるなんて、ファイルくらいしかいない…………つて！

「ファイル！？ なんでここにこんなのが！？ しかもその服装って。」

「簡単よ。今日から私達も風見学園に通うことになったのよ。」

「ぼたん……つて事はナツミも面おもてだらうな。てか、こんな時期に転校つておかしいだろ。」

「時期がおかしいだろ。もう少し早くは無理だったのか？」

「気にしなくてもここ那儿、ココウッチ。」

「やうやく、一緒に通えるんだしさ。」

「まあ、ここや。これからよろしくな。ファイル、ナツミ、ぼたん。」

なんか一気に騒がしくなりそうだな。

……なんか後ろから黒い気みたいの感じるんだけど、後ろって……。

「影兄、そちらの方は、誰ですか？」

音姉と由夢からかなり黒いモンがでてる。怖いんだけど。

「お姉ちゃんも知りたいなー、影君。」

「えっと、ファイル、ナシミ、ぼたん頼む。」

「わかった。ボクはファイル・イハートだよ。よろしくね。」

「私は鈴木、ぼたんよ。ぼたんでいいわ。よろしく。」

「ぼたんはやっぱ名字が嫌みたいだな。明らかに顔が嫌そつたし。」

「ナシミはナシミ・キャメロンなのをー。」

「あ、私は朝倉 音姫。よろしくね、ファイルさん、ぼたんさん、ナシミさん。」

「私は朝倉 由夢です。よろしくお願ひしますね。」

良かつた。自己紹介のおかげか、黒いモンが無くなつてゐる。

「俺は桜内 義之だ。じゃあ、先行くな。」

ガシッ

「逃げるな。俺を独りにするつもりか。」

「やめろー!巻き込まれたくないんだ。」

義之の野郎自己紹介した後、すぐに逃げようとしたやがつた。絶対に

逃がさねー。

「ねえ、影兄。先輩達といつ知り合ったの?今日から学園に通うみたいだけど。」

「暇つぶしに街を歩き回ってたときにな。」

その後ちょくちょく遊んでたな。毎回ナシ///に振り回されるし、フレイルにはなんとかフラグ建つてたみたいで、会う度に抱きつかれてるんだよな。

「そりなのさ。おかげでいろいろと楽しかったのさ。」

「それより、そろそろ行かないと遅れるわよ。」

「やうだな。」

まさか朝から出合つなんてな。これ以上増えたら捌けなくないか?

嫌な予感するし、もつと増えそうだな。

「やうだ、ナシ//達は先に行くのさ。」

「どうしてだ?」

別に一緒に行つても大丈夫と思つんだけど。何人か空気になりそつだけどな……。

「転校の手続きがあるからよ。まあ、そんな難しくないみたいだけどね。」

「えー、まだ蒼影といたいな。」

「駄目よ。ナシミ行くわよ。」

「わかつたのや。」

ナシミとぼたんがファイルが引つ張つていく。

ファイルには悪いけど人数減つてくれてありがたいな。只でさえ今は眠いんだし、人数多いのは面倒だ。

「なんか個性的な友人だつたな。蒼影。」

「そうだね。でも、面白い人だつたんじゃないかな。」

「影兄の友達つて変わってる人ばかりだよね。」

「それは一番俺が分かつてるから。」

D・C・キャラももともと個性的だし、ナシミ達に深倉姉妹も個性的だよな。

別に楽しいからいいんだけどな。生きてた時はつまらなかつたからな。

「蒼影じゃないですか。おはよつつす。」

「蒼影に音姫もいるのか。おはよつつす。」

考へてたら早速来ちやつたよ。なんで今日こいつて来いかなあ？

「恋花に鈴花さんおはよー。」

そいえば、恋花さんは音姉と同じ年で同じクラスだったな。

「おはよー、恋花さん、鈴花。」

「おはよー、おはよー。恋花先輩、鈴花先輩。」

あれ？ 義之助に行つたんだ？ さつままでいたような気がするんだが。

「桜内（義兄）なら、先に行つたつすよ（行きましたよ）。」

「心読むんじやねえ。」

答え貰つたのはいいんだけど、なんで鈴花と由夢心読めるんだよ。

「別に」読んでないつすよ（ですよ）。

「やつだ、蒼影。今日来ないか？ 面白いモン入つたしよ。」

「なら、今日行くよ。」

「なら、今日蒼影のクラス行くからよ。」

「影君どこが行くの？」

「影君どこが行くの？」

「少し本屋に行くつもりだよ。出来るだけ早めに帰るから。」

音姉達には、教えてなかつたけな。別に教えるても大丈夫だろうけど、なんか自分だけ知つてゐるのは嬉しいしな。

そうだ。鈴花にまゆき先輩にバレた事教えないとな。

鈴花はいろいろと協力してくれるしな。

「鈴花、実はさ生徒会にバレたみたいだ。」

後ろにいる音姉や由夢に聞こえないうに、鈴花に囁く。鈴花は少し驚いていたが、表情には出していなかつた。

「生徒会こっすか？蒼影がバレるようなへマをするとは思えないっすけど。」

「俺じゃなくて、杉並が言つたみたいなんだよ。

そのせいで、生徒会にバレてしまつてな。」

「確かに杉並なら氣付いてもおかしくはないっすね。

これからどうするつす？後、あたしの事がバレてるかで、対応が変わるんじゃないっすか？」

「音姉の反応では、分かつてないみたいだ。後、面倒くさい事に杉並より上になつたみたい。」

「もしかして、まゆき先輩に音姫先輩をはじめとした生徒会つすか？」

「俺の言葉に対して、鈴花は笑つてそう言つた。

有り得ないって思つてるみたいだけど、その通りなんだよな……。

「え……、まさか……。」

俺が何も言わない事に気付いたみたいだな。

「生徒会総出だとよ。」

「面倒つすね。蒼影はどうするつすか？」

「文化祭はそろそろつす。いまさら計画は変えたら面倒つす。」

「変えないよ。まあある程度生徒会を視野に入れてたし、まゆき先輩と音姫をなんとかするだけだ。」

「了解つす。」

鈴花は後ろのメンバーの所に戻つていった。

やつぱり協力者を増やすべきかな。

「しかしまゆき先輩とは面倒だな。」

「誰が面倒なの？」

「そりゃまあ先輩だつて。」

「どうして?」

「杉並に集中してたの?、俺の対応だろ?運動も出来るし、敵になるとね?」

「うううとせりへへなるし。特に今回の文化祭とかある。」

「へえ、また何かする気なんだ。」

「……、このパターン何時経験したよつた。そして、相手は決まって本人……。って事は……。」

「おまよつ、蒼影。」

「ま、まゆき先輩……。いつの間に……。」

「わざわざ姫に挨拶したといつよ。そんな事より、いままで杉並に隠れていらうやつてたみたいね。」

「えつと、それは。」

なんか今日のまゆき先輩黒いわ。やつぱり隠れてやつてたのがばれたからか?

「うつこつ時は『三十六計逃げるに如かず』つてね。」

「先行くんでー。」

「あー待ちなやーこー！」

なんか言つてゐるけど、今は無視。学園に着いて時間が経てば元に戻るだろ？。

そいえば、『三十六計逃げるに如かず』って言葉にある三十六計は、中世頃の中国の兵法書の事で、兵法における戦術を六段階の三十六通りのに分けてまとめたものらしい。

「三十六計逃げるに如かず」という故事が有名だけど、形勢が不利になつたときは逃げて体勢を立て直すことを意味したもので、「逃げるが勝ち」という解釈は俗説らしいな。この故事自体も兵法三十六計とは関係ないみたいだし。

合ひしるよな？暇つぶしに調べたんだよな。最近は孫子とか調べてるな。

つて、こんな事考えてたら大分離れたみたいだな。

「どうした、同士波柳。かなり疲れているようだが。

出て来たよ、すべての元凶がよ。

「おまえが生徒会に情報流したせいだろうが。

「ふむ、何の事やらわからんな。」

「ふーん。実は今日は、弁当多めに作つてしまつたんだよな。

杉並は食べないみたいだな。」

「なぬつ。」

杉並には何度か俺の作った料理を食べさせた事があるからな。

その後は、なんでかたまに頼んで来たからな。でもなあ……。

「なんだその反応は。」

「うむ、どうしたものかとな。」

生徒会にバレたのもあって、杉並には少し協力して欲しいからな。

ただなあ、単純じやないか?」

「何を言つ波柳よ。あれは食わなければな。」

「心読むなよ。それと、俺の料理は麻薬か。」

食わなければって、中毒性があるわけでもあるまいし。

「口に出していたぞ。あの料理は一度食べたら忘れられないからな、
そう言つ意味では麻薬とも言えるな。」

諭められてるのか、貶されてるのか。

「まあいい。食つなら貸し一でどうだ?」

「何をするつもりだ? 波柳が俺に頼るとは。めずらしこな。」

「お前のせいで、生徒会総出なんだよ。まゆき先輩と音姉は」いつがなんとかする。」

「なるほど。やはりそうなったか。いいだらう、高坂まゆきと朝倉姉以外は簡単だからな。」

「なら、頼む。弁当に関しては、毎に他のやつもあつめてからな。」

「いいだらう。さらばつー。」

……、あいつ人間か？俺は見えるが、他の人は絶対見えないだろ。

さて、杉並の協力を得たし、生徒会相手は楽になつたか。

「あーー、蒼影君。おはよお。」

「あー、蒼影。今日は一人なのね。」

「蒼影、おはよう。」

次は雪月花ですか。なんで今田はこんなにも人と出会つんだよ。まあいい、ついでだし三人にも弁当の事伝えとくか。

「今日弁当多めに作つてしまつたから、一緒に食わないか？」

「蒼影が作つたの？蒼影の久しぶりだね。」

「蒼影、料理できたの？」

「うん、蒼影君出来なさそうだよね。」

「失礼じゃね？そりゃ、あんまりやらないけど、家ではそれなりにやつてるだ。一応、音姉と義之に教えたしな。」

「そうだよ。蒼影の料理は一度食べたら忘れないほど、美味しいんだからね。」

「なら、お皿を楽しみにしてるわ。」

「わうだね、小恋がわいまで言つんだもん。」

「小恋ハーデル上げてんじやねえ。」

「え、え。丹島は悪くないよー。」

「まいー。ありがとな。誉めてくれて。（ナギナギ）」

人に誉められるのは嬉しいからな。小恋の頭を軽く撫でる。

「あう。——」

「朝から熱いよねー、二人共。」

「なに言つてるの、茜。私はそんな。」

また一人の小恋弄りが始まつたな。

俺は、気づかれない内に先に行くとするか。

しかし今日は登校だけでかなり疲れたな。この後は、多分文化祭の

話し合って、イタズラの計画も微調整しないとな。

後、文化祭ってなにやるんだ？原作で言ってなかつたような。言ってたとしても、深倉姉妹やフィル達がいるから、変わってるだろうしな。

まあいい、眠にしまづは寝るとするか。

「面倒で忙しく登校（後書き）

新しく、FAIRYTALEの小説書きついでに書つたんだけど、どうしよう？

書いたら、D・C・?のキャラも一緒に歩いて事にするんで、D・C・?とかのキャラも出ます。

小説の感想とか欲しい。なんか心配になるんですね。面白いかとか。

FAIRYTALEはじめよ。出来たらその事も意見ください。

文化祭の話(前書き)

初音ミクの新作やつてたら、執筆忘れてた。

今回はいろいろやつすがたよつな……。

文化祭の話しあい

教室に着いたけど、まだ誰もいないな。おつ委員長がこるじゅん。
義之達よりは親しいし、どうせ時計の設計図でも作っておくしかや
る事ないし、話しかけるか。

「おはよーさん、委員長。」

「おはよう、蒼影。今日は早いのね。」

ちなみに、委員長は俺の事を下の名前で呼んでいる。俺は気分で委
員長だつたり、麻耶つて呼んだりしている。

「まあな。そうだ、今日弁当多めに作ったから、一緒に食べないか
?」

さつき気付いたんだけど、思つたより余りがかなり多いからな。多
分寝ぼけてたんだと思い。確か五人分くらいあつたからな。どうり
で重いわけだよ。

「せつかくだけど、遠慮しておくれ。杉並達もいるんでしょ?」

「もうだけど。まだあこいつら苦手なんだ。」

「別に、そんなのじゃないわ。」

「いいけど、友達が俺だけって可哀想じゃない?」

「別に……、つべつべつて友達があなただけになるのよー?」

「だつてあんまり話してなくないか？」

「そんな事ないわよ。」

「別にいいんだけど。」

「誘ってくれたのは、感謝するわ。」

やつぱり委員長は駄目だったな。まあ、雪月花や杉並達いるし、なんどでもなるだろう。しかし、なんであんなに作った上に持つてくるまで気がつかなかつたんだ？普通に考えたら、気がつくと思つんだけど。

おつ、あれは義之達か？雪月花や涉も一緒に来てるな。見る限り相変わらず杏と茜は小恋をいじつてるな。義之は標的が自分にならなによつに、避難し見てているみたいだな。涉は……、いつも通りバカだな。

あ、涉が杏に殴られた。何をしたんだあいつ。

ん？義之の後ろはまゆき先輩に音姉、由夢、恋花さんだな。まゆき先輩は大分落ち着いてるな。これなら俺も大丈夫か？

「何を見ているのだ？同士波柳よ。」

「見りやわかるだろ。窓の外だ」

「それは分かるが何か見えるのか？」

「人が見える。」

まあ、他の人は見えないと思うけどな。

「ふむ、まったくわからんな。」

分かつたら怖いから。

「そんな事より。急に、しかも後ろに現れるな。驚くだらうが。」

「その割には、驚いてないよう見えるが。……まあ考えておこう。」

いくらなんでも急に後ろに立たれたら、驚くにきまってるっての。俺は分かつてたら、それでもなかつたんだけど、分かつてなかつたら声出したかもな。

「……」「……」
といつより、あいつどこから入ったんだ？。つて、もう消えてやがるよ。本当にあいつ人間なのか？

まあいい。あいつらが来るまで時計の設計図でも、書いておくとするか。クリパの日までには渡したいしな。実際は、今からでも渡せるけど、自分のコレクション用と一緒に魔法つて力をつけておきたいからな。

自分用には、固定《ホールド》に自動調整《オートコントロール》、結界《けつかい》でいいか。他には、これ+迎撃用に何かつけるか。実際は結界だけで十分かもしれないから、つけなくてもいいか？ちなみに、固定、自動調整、結界は名前の通り。

固定は物などをそのままの状態に出来るから、壊れなによつてするには一度良い。

自動調整は、物を最善の状態にするから、時計の時間合わせにほかなり役に立つ。

結果は持ち主の身を守る為だな。滅多に無いだらうナビ傷ついて欲しいからな。

「おひ、おひ、おひよー。おひよー。」

もうみんなが来たみたいだな。

「おひ、おひよー、渉（バカ）。

「今バカって言わなかつたか！？」

「言つてないから安心しな。」

「なら、いいか。やうだ、聞いたぞ。弁当作つてきてくれたんだろ？」

「余つただけだ。」

「やつたぜ。くっー、楽しみだぜー。」

「板橋、つるをこつす。少し黙るつす。」

「ひどい。」

「酷くないだろ。普通の対応だ。」

「あ、そんな……。うわーん、蒼影のはかやらおー。」

少し鈴花に会わせてしまつたら、渉はどこに走つてこつた。

それからエリはじめるんだが。まあ、いつもの事だし、少ししたら帰つてくるか。

「蒼影、まゆき先輩かなり怒つてたつすよ。今回ヤバいんじやないつすか?」

「やつぱりか。でも、計画はやねえ。折角考えたんだし、鈴花も止める気ないだろ?」

「当たり前つよ。」

今回は、鈴花も一から関わつたしきんな所で止める訳ないよな。

「でも、本当に高坂先輩怖かつたんだかい。」

そつや、小恋は怖つて思つだらうつな。和や西は逆に楽しもうだけ。

「大丈夫だつて。なんとかなる。」

「蒼影は気楽だな。」

「おやらなんだけ?、義えつてどりこつたんだ?逃げてたし、俺よ

り先に来ているとおもつたんだが。どうでもいい事なんだけどな。

「席につけー。転校生三人紹介するから。」

ざわざわ

クラスがざわめく。そりやそうだ。この時期に転校なんて珍しいからな。普通なのは……杉並と俺か。

義之はなんで驚いてんだよ。あれか? 全員このクラスだからか?

「なあ、普通全員同じクラスにするか?」

「たまにはこんな事もあるだろ。」

「いやいや、普通ないだろ。」

「気にしなければ大丈夫だつて。」

俺はなんとなく分かつてたしなー。杉並が驚いてないのは杉並だからだな。それより杉並、涉がいつ戻つて来たのが気になるな。

「ボクはフィル・イハートだよ。よろしくね。」

「……鈴木 ぼたんよ。」

「ナツミ・キヤメロンなのわー。」

「なあなあ、あの子達可愛くない?」

「つむ。レベルは高いだろ？」「

「だよなっ、だよなっ。蒼影も義之もやつ細ひつよなっ。」

「まあ、やうなんじやないか？」

「…………。」

義之は答えたみたいだけど、俺は答えない。理由はファイルに聞かれでもしたら、学校関係なく抱きついてくるからな。敵は増やさたくない。

「三人は後ろに座ってくれ。」

「後ろって……、近つ！

「よろしくなのを、リュウウッチ。」

「よろしくね、蒼影。」

「よひじくべ。」

なんで今話しかけるかなあ。涉や雪月花がこいつら見てるじゃん。後でこりこり聞かれるだろ？なあ。……皿に話すって事にするか。どうせ皿に三人を誘つつもりだつたしな。

「じゃあ、HR終わるだ。今日は文化祭も近いし、文化祭の話し合いがあるからな。委員長頼むだ。」

「わかりました。」

委員長も大変だよなあ。あ、そつそつ委員長で思い出したけど、原作で壊された美秋なんだけど実は生きてるんだよな。天枷 美夏も眠りに今はついてなく、由夢と同じクラスで過ごしている。もちろん認識変更『にんしきへんこう』を使って口ボットって事はバレないようになっている。

後、美夏を起こしたのは俺だ。これは偶然だったがな。んで、美夏、美秋は俺の過去を知っている。美夏の人間嫌いは少しは軽くなつて、俺の事はかなり信用してくれてる。

話を戻すけど、美秋なんだけど、原作で覚えてる所で変えたかつたから変えてしまつた。実際対して影響はなく、委員長の口ボット嫌いが無いくらいだ。今は、沢井家で暮らしてる。なんかフラグ建つたみたいだが。性格はお姉さんみたいな感じだな。原作には余り登場してないし、変わつてるとかよく分からぬ。

ついでに思い出したが、茜のもつ一つの人格？藍に関しては、この世界では生き返らせれないが、転生時に出来るようになつてる。

まあ、これに関しては、茜には内緒にしてる。知つてるのは俺と藍だけだな。

まひるも転生時に生き返る事になつてて、今は別荘……貰つたダイオラマ魔法球で暮らしてる。今更なんだけど、かなり原作壊してるよな。他の一次でもこまではないぞ。

まあ、美秋が生きてて委員長も家つてか私生活では、原作より笑顔増えてるっぽいし、美秋も幸せそうだしいか。

バンつ

「な、なんだ！？」

「桜内よ、森原良二田をつけられるわ。」

いつの間にか原作っぽい展開になつてゐる。義之が寝てるのも似てるし。

「蒼影、なんかずっとじまーっとしてたね。」

「そんなんにか？」

「うん、動いてはいたけど、ボク達がなに言つても反応してなかつたよ？」

……、確かに時間たつてゐるな。一、一時間か……。

「なんか悪いな。」

「別にこことよ。」

「提案があるつす。」

鈴花？ああ、計画の為に、クラス企画は生徒会に警戒して欲しいからな。ただでさえ警戒されてるから、少しばかりに向いてもらわないと。

「深倉さん？何？」

「あたしは喫茶店がいいです。ただの喫茶店ではないですけど。」

「どんのがいいの？」

「やうすね。ギャンブルってのはどうですか？ギャンブルで勝てば安く負けたら高く、値段を決めるとかどうですか？もちろん、いつも有利になるようになりますけど。」

「あ、あのねえ。」

「面白うわね。」

「……雪村さん、鈴木さん？」

なんか、杏とほたんつて話し方とか似てこるよな。

「SIRの生徒会や先生がどんなのかはしらないけど、面白やうだわ。」

「

「やうね、書類上は普通の喫茶店にしておけば、大丈夫よ。」

「そんな事出来るわけないでしょ。」

「でも委員長、みんなは賛成みたいですよ。」

確かに、クラスメイトは全員賛成っぽいな。これなら委員長でも却下出来ないだろうな。委員長には悪いが、おかげで楽になる。でも今回はあんまり計画無いんだよな。今立ててるのは、放送室を占拠している音楽流すのと、学校の至る所にリアルな化け物の置物置いたりして恐怖スポット作るだけなんだよな。

まあ恐怖スポットには、カメラを仕掛けんしリアクションとか楽し
みだけど。

「わ、わかったわよ。なら喫茶店でいいのね。」

「そうね。書類は私が書くわ。」

「いいの?」

「ええ。」

「へー、杏が自分からやるなんて言うとま。書類を杏が書くのはあり
がたいな。杏なら生徒会騙せるだらうじ。」

「なら、私も手伝うわ、雪村さん。」

「鈴木さんも?」

「ぼたんでいいわ。」

「そう、ならお願ひするわ、ぼたん。」

杏とぼたんって話し方とか似てるし、似た者同士気が合ひつか?

結構みんな乗り気だし、今回の計画は簡単だから生徒会もなんとか
なるか。

まゆき先輩や音姉つて生徒会の時怖いからな。捕まらない様にしな
いと。

「ギャンブルってなにあるのさ?」

「ポーカーやファイブカードとかのトランプ系はどうだ?」

トランプ系なら、俺とイカサマ出来るしな。ファイブカードはイカサマ出来ないか。

「賛成ー。あれなら、簡単に用意出来るもんねえ。」

「なら、やつするつす。いざとこう時も誤魔化せりつすし。」

「それで、メニューはどうするの?」

「軽くつまめる物が良いんじゃないかな?」

「やうだねー、それならボク達でも作れるもんね。」

話し合いは進んでるし、仕掛け作らないとな。これに関しては、力は使わいで技術でやりたいからな。絡繰りとか好きだし。

まあ、部品に関しては力を使はしないんだけどな。

「うん、美味い。」

何食ってるか?実は暇つぶしにこの前非常食作ったんだけど、結構美味しいんだよな。味はいろいろあるんだよ。苺やメロン、蜜柑とかのフルーツに、カツ丼、牛丼とか丼物も作った。ただハズレも有つてハズレは吐きそうなくらいまずかった。

「おい、蒼影。何食つてんだよ。」

「見りや分かるだろ。非常食だよ美味いぞ？いるか？」

「非常食つて何作つてんだよ。しかも非常時じやないし。」

「思つたより美味かつたんだ。しきうがないだろ。ちなみに、杉並や鈴花、ナツミも食べてるぞ？」

「おお、桜内よ。お前もどうだ？」

「蒼影、これ美味しいすよ。桜内もどうす？」

「美味しきのや。」

実は他の人にも大好評なんだよな。杉並はいろいろしてるし、結構頼んでくる。鈴花は手伝つてもらう時に渡すし、ナツミも似たようなものだ。

「ふおい、ふあんまあふいだ。」

「分からぬよ。」

ングッ

「サンマ味だ。」

「サンマ味ー？なにその非常食ー？」

魚のエキスみたいので、魚味作つたけどこれが当たつたんだよ。

「桜内！あなたも話し合いでに参加しなさい。」

「俺…？」

怒られてやんの。ん？終わったみたいだな。

「明日からは、準備するから、ちやんと協力してよね。」

「わざりんっす。」

「書類は今日中に出しておくわ。」

「ええ、まいしぐね、雪村さん、鈴木さん。」

文化祭の話(後書き)

原作かなり壊しました。書いてたらなぜか美秋生存に。

まあ、後悔はしてないんですけど、やっぱりやりすぎですかね？

■の息抜き（前書き）

今回は少ないと思こまゆ。

昼の息抜き

ふあー。もう昼だな。弁当を用意しとかないと。ただなあ、朝から思つてたんだけど、重いんだよ。自分で持つてくのは面倒なんだよな。涉と杉並、義之に持たせるか？食つ場所は外の方が気持ちいいし、移動するだろうしな。

「蒼影つー早く昼飯食おうぜ。」

「板橋よ、落ち着け。弁当は逃げはしないのだからな。」

丁度いい所に来たな。

「悪いけど、弁当一人も持つてくれないか？」

「いいぜ。」

「まあいいだろ。」

「なら、これな。」

「これデカくないか？」

「二人で持つんだし、大丈夫だろ。」

「人に渡した料理は、約五人。実際持つてきたのすべてだから、俺は自分の分しか持たなくていい。」

「蒼影、どこで食べるつすか？」

「外ならどうでも。雪月花はどうがいい?」

「私達は別にどうでもいいわ。」

「うんうん、小恋ちゃんはー?」

「わ、私もいいよ。」

「じゃあ、決定か。鈴花連れてつておいて。他の人連れてくるから。」

「了解です。」

「後は、ナツミ達だな。なんかナツミ特ダネとか言つてどこに行きそうなんだが。」

「蒼影、どうしたのかしら?」

「昼飯だからな、誘いにきたんだ。場所も分からないだろ?」

「ありがと、蒼影。」

「蒼影、早速行くわ。案内するのさね。」

本当ナツミ達は元気だよな。俺だったら、転校したばかりなら絶対緊張するんだけど。

「行くから付いてくれ。」

「了解なのさー。」

鈴花に教えてもらひた場所に行くと、全員集まっていた。

雪月花は弁当作ってるみたいだな。ナツミ達は今日作って無かつたよな。

「おつかせーぞ。」

「ん？ そこにはいるのは、転校生か？」

「ああ、知り合いだし、誘つたんだ。」

「そいえばー、蒼影君つてばいつの間にか仲良くなつたのー？」

「そ、そうだよ。月島まったく知らなかつたんだよ？」

「それは食べながらでいいだろ？」

俺的には、料理を食べてもらひて料理の感想を聞きたいたからな。やつぱり久しぶりに作ったから、腕が落ちてるかもしれないし、家族じゃない人の感想も聞きたいからな。

「そうね、蒼影の料理は初めてだから、楽しみね。」

「杏は初めてなの？」

「ええ、ぼたんは食べた事あるの？」

「あるわよ。とても美味しかったわね。」

といえば、ぼたん達には一回作つたけな？あれは結構嬉しかつたな。

「なあなあ、いいから早く食おうぜ。」

「そうだな。なら。」

さて俺は自分の食べるとするか。今日は、唐揚げ、焼きそば、おにぎり、肉団子、サラダ、厚焼き卵、オムソバに小さく切ったパンとジャムだ。パンとジャムは別に分けて入れてる。一部以外定番の物ばかりだな。

この年になつておにぎりはなんか恥ずかしかつたな。

「なんだよ、コレ。美味すぎるつて。」

「相変わらずの美味しさだな。」

「ありがとう。後、涉は少し落ち着け。」

涉は一口食べた後、どさどさと食べてこつてる。これなり、全部なくなりそうだな。

「やっぱり蒼影の料理美味しいね。羨ましいなあ。」

「小恋も頑張つたら出来るつて。なんなら教えてやるよ。」

「蒼影君、本当に料理上手なんだねー。」

「確かに蒼影にしてはやるわね。」

「杏、俺にしてはってなんだ。」

杏はたまに失礼な事いいな。俺にしてはって、讃められてるのかわからん。しかも何を基準に決めてるんだ？

「やつぱり美味しいっすね。」

「さすが蒼影だね。」

「何度も食べても、やつぱり美味しいこのや。」

「美味しいわね。」

「の四人は前と同じ反応だな。美味しいって言つてくれてるしいんだけだ。といつより、ナツミ一度しか食べた事無いだろ。あの非常食は別として。

ふと弁当を見ると、既に四分の一が無くなっていた。食われるの早いな。

「なあなあ、このパンってビーフのなんだ？」

「手作りだけど？」

「パンも作ったのかよー。すげーな、蒼影。」

「まあ、趣味でもあるからな。いろいろと作ってるしな。今日は基

本的に手作りだぞ? 「

「ええつー本当!」—? 「

「あのなあ、茜。俺は人前ではあまりしないけど、結構料理やってるし自分で創作してんだぞ? 」

「そうだぞ、花咲よ。」

「なんで杉並が言つんだよ。」

「俺はよく食べるからな。まあ、簡単な物ではあるがな。」

「本当なのか!? 」

「確かに、杉並、鈴花はよく食べるな。」

杉並や鈴花には世話になつてゐるしな。まあ、杉並は迷惑もかけられているが、俺は味見役になつてくれてるからお互い様だな。

「ずりーぞ。俺もこんなに美味しいなら、もつと食いたいっての。」

「私達も食べたいわね。」

「ナツリもまた食べたいのや。」

「ナツリもまた食べたいよな。」

「ボクもー。」

「わかつたつて。気が向いたらまた作つてやるから。」

はあ、約束した事だし、また作らないとな。次は新作作つて味見役にしてやるか。

「蒼影――！」

「」の顔はまゆき先輩？

「ねえ、あれ高坂先輩だよね。」

「そうね。」

「なんであんなに怒つてるんだろ。」

「蒼影、あなた何かしたのかしら？」

「なんで俺なんだよ、ぼたん。」

「あなたの名前呼んでるじゃない。」

「うぐう。」

「その反応は何かしたのさ。」

何かしたかな？朝以外記憶に無いんだけど。

音姉も？しかも声怒つてゐるし。本当に俺何をしたんだ？

「影ぐーん。」

「蒼影、音姉まで怒つて何したんだよ。」

「分かつたら苦労せん。てか、逃げるわ！」

「ふむ。高坂まゆきに朝倉姉か。逃げ切れよ、波柳よ。」

「頑張れー、蒼影。骨は拾うから。」

「見つけたわよ、蒼影。よくもやつてくれたわね。」

「影痴へ~どういう事なのかな?」

……、本当になんでなんだ。何かしたか?

その時田に入ったのは、空になつた弁当箱。そして普通の状態のみんな。

あれ? 確か弁当にはイタズラとして、大量のワサビやカラシして
いた……は……ず?

たしか全員の弁当に、手を加えたよな。空きもあつたし、余つたの
入れたよな?

まさか、もしかして、音姉に渡した弁当に入れた料理にワサビ、カラシ入りを入れたのか?

そしてそれをまゆき先輩が食べたとか? 朝の事もあるし、余計に怒
つたとか?

……おじえんな。

「音姉、まゆき先輩何があつたか知らないけど、まずは落ち着いて話してくれない？」

「何があつたか知らないねえ。」

「ふーん。影君はそんな事言つんだ。」

「蒼影、とぼけてると、ぬつこむわよ。」

これはマジだ。さつき考えてた線があたりかもな。

えと、人もいる。蒼影借りていい?」……し。

卷之三

「あー、頑張るつすよ、蒼影。」

全員俺を売りやがった。同じ立場なら、俺もすると思うけどな。

「聞きたいんですけど、もしかしてワサビとかカラシが「入つてたよ。影君はお姉ちゃんが嫌いなのかな？」……。」

「どうも、さうだ。

「うーん、したくながる話しても、今すぐねえか？」

卷之六

「一つ言つ事聞くつてのとかは……。」

「……まあいいわ。あたしはそれでいいわ。音姫は？」

「まゆきがいいなら私もいいよ。」

良かつた……。一つ言つ事聞くつてのは心配だが……。あれに問い合わせられるよりはマシだ。

なんか、義之、杉並、渉、鈴花以外の視線が怖いが。

鈴花は今度計画ついでに、買い物行くからか？

「なら蒼影。忘れたらぬつゝひすから。」

「影君は忘れたりしないから、大丈夫だよ、まゆき。」

「なら、俺は教室に戻るんで……。」

周りの視線が痛いし、とつと逃げる。

「弁当は義之頼むな。」

「まったく自分で持つて帰れよな……。」

義之が何か言つてるけど知るか。

教室には、委員長が本を読んでいた。

「何の本読んでんの？」

「お姉ちゃんに進められたのよ。」

「美秋さんか……、元気なの？」

「ええ、といえばお姉ちゃんが『蒼影君に遊びに来てねって伝えておいてね。』だって。勇斗も言つてたわよ。」

「マジか……。なら近い内行つていいか？」

「ええ。来るときは教えてくれたらいいわ。」

「了解。じゃあ邪魔するのも悪いし戻るわ。」

「ええ。」

委員長の家行かないとなあ。美秋さんもそうだし、勇斗とも遊ばないとな。委員長も結構歓迎してくれてるしな。

てか約束多いしこれから疲れそうだな。

暁の息抜き（後書き）

文化祭やるから、その間の話をオリジナルで作らないといけないんだけど、最近ネタが思いつかない。なんかいいのないですかね？

あと、皆さんお戻しに入りや感想ありがと/or/ありがとうございます。

本と打ち明け（前書き）

最近一日に一回のペースをキープしてゐるが、こつまで出来るか。

本と打ち明け

ふう一、授業終わったみたいだな。授業中にずっと時計の設計図書いてたから、なんとか完成したな。後は作るだけなんだけど……、これ作つてたらクリパまでに他の時計渡せないから、先に渡す時計に力付与しどくか。

実際力 자체は作つてるし、付与も直ぐに終わるからな。

音姉、由夢、さくら、アイシア、義之は家で渡せるし今日渡せばいいか。後、鈴花と恋花さんにも渡せるかな？

そいえば時計渡すの何人になるんだ？今結構親しい人は……

女的人は朝倉姉妹に深倉姉妹、沢井姉妹。後、雪月花に美夏にさくら、アイシア、まゆき先輩、フィルにナツミ、ぼたんか。後、藍とまひるはこの世界では無理だろうから、渡すとしたら次の世界に行く時か。まあついて来るかは分からんんだけどな。

ん？そいえば美秋は麻耶と姉妹でいいんだよな？

んで、男は三バカに勇斗かな？

つて事は……女十八人、男四人か？

後、原作キャラでななかにエリカがいるから一応+一人か。まあ、仲良くなるかは分からんんだけどな。

結構多いな。今完成してるのは、男用四つに女用が十八だから、一

応あと二つだ。

今の所はなんとかなりそうだな。

ん？付』も終わつたな。これで今日は深倉姉妹、朝倉姉妹、そへり、アイシア、義之の七人に渡せるな。

ちなみに時計は基本的にデザインは同じだ。男女ではデザインは違つて、時計にはそれぞれ名前を彫つてある。本当は一人一人にデザインを考えたらいいんだけど、俺には思いつかなかつたからな。

「おーい、蒼影。来たぞー。準備したら行くぞ。」

「姉さん、少し落ち着くつすよ。周りが見てるつすか？」

「別にいいだろ。すぐに帰るんだしよ。」

「そういう問題じゃないんつすよ。」

恋花さんが来たみたいだな。てか鈴花も言つてたけど、落ち着いて欲しいよ。周りの視線が痛いんだけど。

「恋花先輩、鈴花先輩の言つとおりですよ。影兄は逃げませんから。」

「由夢の言つとおりだぞ。蒼影は約束を破つたりしないからな。」

この壇つて由夢と美夏だよな？もしかして由夢と美夏も一緒にいくのか？

「蒼影、行くつすよ。」

「ああ。」

「いつの間にか鈴花来てたんだ。さつきまで向こうで話してたの。」

「蒼影、遅いぞ。」

「悪い、それより何で由夢と美夏が？」

「美夏と由夢も一緒に行くんだぞ。」

「そうなんだ。なら、行こうぜ。」

「つむ、時間も無いからな。鈴花先輩、恋花先輩早く行くぞ。由夢も行くぞ。」

「美夏、まつてくださいよ。影兄、早く行きましょう。」

「ああ。鈴花行くぞ。」

「了解つす。」

美夏は由夢を引っ張りながら恋花さんと先に行つた。美夏は人間嫌いが少し無くなつてゐし、俺の信用してゐる人には仲良くしてくれてる。

そのおかげか原作とは違つて由夢も天枷さんではなく美夏と呼び捨てにしている。

「うわ、ちなんですか？」

由夢が隣を歩きながら心配そうに聞いてくる。まあ、確かに人通り少ない所を通るし、初めてなら心配になるのはわかる。

「やうだぜ。まあ、心配しなくても大丈夫だから安心しな。」

「わかりました……。」

「そいえばさ、手には入った物って何なんだ？」

「あー、まだ言つてなかつたすね。」

「孫子の兵法書だよな、鈴花。」

「やうひすよ。孫子の兵法書と曹操が注釈した本みたいつす。」

孫子に曹操の注釈ねえ。曹操はともかく兵法書は普通に手に入ると思つんだけどな。

「それが珍しいか？」

「実は元の本をそのまま写してゐみたいつす。普通は翻訳したり書き直しが入るつすから。」

確かに元そのままなら[レ]写しても珍しいかな？実際に昔の本は書き直しがあるしな。

「兵法書？孫子？なあ、蒼影一体どんな本なんだ？」

「あ、影兄、私も知らないです。」

「美夏と由夢は知らないのか？」

「蒼影、普通は兵法書なんか知らないですよ。」

そんなもんか？まあ、確かに知らなくても困らないしな。

「孫子の兵法書つてのは確か。中国・春秋時代に吳とこう国の王、闔閭に仕えた名将・孫武が著した兵法書の名で、中国の代表的兵法書『七書』のひとつで、三国志の諸葛孔明や曹操などが活用したらしいな。戦略論としての評価は非常に高くて、中国人はこれを「孫子以前に兵書無く、孫子以降に兵書無し」とまで評してるぞ。」

ちなみに、世に「孫子」と呼ばれる兵法書はもう一つあって、孫武の子孫で戦国時代の齊の人、孫ビンの著した「孫濱兵法」と云う書も、「孫子」と呼ばれているみたいだな。後は、この書は以前は史書に名前が見られるだけだし、実在が疑われていたんだけど、確か漢時代の墓からその竹簡が発見されてから、実在が立証されたみたいだぞ。

そうそう、中国には古来多くの兵法書が伝えられて、中でも、孫子、呉子、六韜、三略、尉繚子、司馬法、李衛公問対を七大兵書つて言うらしいぞ。多分これがさつき言つた『七書』だろ。その筆頭に掲げられ、非常に高く評価されているのが、孫武が著した孫子の兵法なんだよ。」

「蒼影はやけに詳しいのだな。どうしてそんなに詳しいのだ？」

「やつですね。流石にひきますよ。」

「少しひ国志に興味が有つてな。そん時孫子を知つたから調べたんだよ。まあ、二国志はまだあまり知らないんだけどな。」

「うなんだよ。一部しか知らないけど、二国志の呂蒙と孫策、張遼が好きになつて本格的に二国志見てみよつと思つたら、孫子があつたからついでに調べたんだよ。」

「でも、俺も蒼影くらいは知つてゐるぞ。」

「あたしもつすよ。」

「鈴花先輩に恋花先輩もですか？」

「凄いのだな。」

由夢はなんか呆れてるけど、美夏はそつでもないみたいだな。

「おー着いたぞ。」

「ここに来るのは久しぶり……じゃないな。確か一週間くらい前に来てたわ。」

「大きいな、ここが恋花先輩達の家なのだな？」

「やつすよ。まあ、店もあるので家はそこまで大きくないつすよ。」

由夢は驚いているみたいだな。もしかしてこんなに大きいと思わな

かつたか？

「由夢、正直」こんな所にあるから少々ことで黙つてただひへ。」

「まあまあ。しあうがないでしょ、影兄。」

「わかつたわかつた。素が出でる。」（ナギナギ）

「は、はやく行きましょ！」――――

「蒼影、」（ヒヂラ）

「今、行くよ。」

さて、早速見せてもらいますか。曹操の注釈とか楽しみだな。

「おお！ 本がいいのだな。由夢、これが普通なのか？」

「一般的にはある部類ですよ。これなら影兄も満足するはずですね。」

「なにそれ？ 僕を中毒みたいに。」

「だつて影兄かなり読むじやないですか。」

「まあまあ、そこまでこすりあつよ。蒼影、」れつす。由夢に美夏も一緒にみるつす。」

「「ひむー。」

「わかりました。」

その後は、いろいろ見て回り少し休むことにした。

「いいつす。飲み物持つてくれるつすから、姉さんも待つてくれつす。」

案内されたのはリビングだった。結構広いが置いてる物はかなりシンプルだった。

といえば、家に入るのは初めてかもな。

「おまたせつす。」

「あ、ありがとうございます。」

「感謝するべ。」

「気にしないでっす。」

「さて、休憩ついでだけど、蒼影に聞きたいことがある。」

「……、なんか真剣な空氣だな。」

「あの、私もいいんですか？」

「いいですよ。由夢も聞いておくれます。」

由夢もつて事は……、俺の事か……？。

「率直に聞くが蒼影、お前何者だ？」

「恋花先輩？」

「由夢も思ひ当たるんぢやないっすか？蒼影のおかしな所。」

「…………。」

由夢にも気付かれてたのか。美夏は秘密を知つてたから、何となく分かつたみたいだ。今も、俺の方を心配そうに見てくれてる。やっぱり優しいな。

「どう言つ事だ？」

「蒼影は異常に身体能力が高いつす。しかも普段は押さえているような気がするつす。」

「しかも、一度時計直してもらつただろ？あの時蒼影は何もなかつたのに直していた。あれは道具ないと無理なくらいだつたのにだ。」

「見られていたのか。周りには注意していたし、鈴花や恋花さんはいなかつたと思っていたのだけどな。」

「さうに言えば、この前蒼影が作った飾り。こんな設備無しに作れないはずつす。」

鈴花が出したのは、この店に付けるために俺が作った飾り。

ここから誤魔化すのは俺では無理だな。ただ、俺の事をバラすとして受け入れてもらえるだろうか。それに美夏の事も言わなければいけない……。

「影兄、影兄が何者でも私の兄です。だから教えてください。」

「由夢の言う通りです。だから教えてくれないですか？」

……、今まで過ごしてきたから分かる。一人……いや、三人か。何も言つてないが恋花さんも同じ様だしな。この三人が嘘でこんな事を言うはずがない。ならば……話すか。

転生の事、技能作成『スキルメイク』について。場合によつては美夏の事も話した方がいいかもな。

「わかつた。今から話す事は有り得ないと思つだらうが、すべて真実だ。」

「蒼影、いいのだな?」

「ああ、美夏。」

「俺は……。」

そして俺は三人に話した。一度死んで転生した事、神様にもらった技能作成の事も。

やはりと言つたか、三人共驚いていた。

「影兄、それ本当なんですか……？」

「ああ、確かに俺は転生した。ただ今俺がここに生きている。それは変わらない。」

「…………そうですね。確かに蒼影が転生したってのは驚いたっすけど、蒼影は蒼影で今を生きてるんっすよね。」

「なら、わざわざ対応を変える必要は無いよな。これからもよろしくな。蒼影。」

「…………そうですね。影兄は影兄で私の兄ですから、別に今まで通りでいいんですね。」

「…………由夢、鈴花、恋花さん。」

「ありがたい。それだけだな。今までは、さくらにアイシア、美夏に美秋。受け入れてくれる人ばかりだったからこそ、否定されるのが怖かった。でも、三人は受け入れてくれた。まあ、少しすんなり受け入れすぎとも思つけどな。」

「ありがとうな、由夢、鈴花、恋花さん。」

「礼を言われるひとはじてねえよ。」

「やつすね。なら聞きたい事も聞いたっしじ、そろそろ解散つすね。」

「軽くない?まあ、シリアル苦手だしといいんだけど。」

「あの、何で美夏は驚いてないんですか？」

「美夏は知っていたからな。」

「美夏は知つてたんだな。でも、どうしてだ？」

「それは美夏がロボットだ「ば、馬鹿！」あ……。」

「おいおい、何でそれを言つかな？確かに美夏は若干抜けてる所あるけど、何もこじんな所で……。」

「へー、美夏はロボットだったのか。」

「正直人間と変わらないですね。」

「ただ、学園にはバレないようにならないといけないっすね。」

「どうしてだ？」

「あたし達がどう思つても、ロボットが通うのはマズいっすから。」

「そうですね。私達の秘密と言つ事ですね鈴花先輩。」

「そうですね。」

「何でだ？何で普通に対応してるんだ？」

「由夢達は美夏が怖くないのか？」

「別に。感情もある、見た目だって人間その物なんだ。怖がる必要はないだろ。」

「それに、影兄の事で耐性が付いたというか……。」

「その通りっすね。」

「美夏は受け入れらて喜べばよいのだろうか?」

「そうなんじやないか?まあ、なんか「メン。」

「じゃあ、美夏の事は秘密でバレないよつて事でいいな?」

「はい。」

「了解っす、なら今日は解散っすね。」

はあ、何かいろいろ考えてたのが馬鹿らしいな。
ん?なんか忘れてるよつた気が……。

「あーちょっと待つてくれないか?」

そうだ、時計を渡すのを忘れてたよ。

「なんっす?」

「三人に渡す物があつてな。由夢には家で渡すから。」

空間箱《ボックス》から時計を取り出しながら言つ。四人にはバレ

てるから、普通に使えるから楽でいい。

えっと、美夏、鈴花、恋花さんのはつと。

「渡す物？ 一体なんなのだ、蒼影。」

「これだよ。」

「これは時計か。でもこれって……。」

「手作りっぽいっすね。何度本で読んだのに似てるっす。」

「その通り手作りだよ。それぞれ時計に名前彫つてあるだろ？」

「本当だな。蒼影、大事にするわ。」

「俺もだ。」

「ありがとうっすよ。」

嫌がられては無いみたいだな。喜ばれてるみたいだし良かった。

「影兄、あれって力で作ったんですか？」

「部品はな。流石に部品は作れる設備ないし。ただ、他は自分で作つたや。」

「あの……、私にも？」

「ああ、もちろんあるから安心しな。」

「心配なんか……。」

「じゃあ、俺達は帰るからな。美夏、鈴花、恋花さんまた明日。」

「また明日です。」

「美夏も途中までは一緒に帰るだろ?..」

「うむ、もううんだ。」

「な、ひ、帰るだ。」

結局帰るの結構遅くなってしまったな。まあ、いいか。

本と打ち明け（後書き）

今回は三人にバレてしましました。

「バラすのじゃなくてバレたのかよ。てか、何で俺が？」

おお、蒼影。他の作者さんの作品見ててやりたくなつたんだ。

「だからって。文才ないくせに無茶するなよ。」

「うひさい。趣味だからいいだろ。」

「まあな。てか、俺の力いるわけ？」

一応、他の世界にも行くんだからな。

「ちやんと完結してからだよな？」

いや、多分途中で。ちなみに設定なら一作品考えてるからな。一作品は結構マイナーだけどな。

「出来るのか？」

更新は遅くなるだろうけどな。

「ちやんと完結するのかよ？」

当たり前だ。少しでも楽しみにしてくれてる人がいるからな。完結は目指すさ。

「でも、この会話これからも続けるわけ？」

多分な。他の人を呼んだりして続けるさ。

「ふーん、まあいい。いつも読んでくれてる人、ありがとうございます。」

ありがとうございます。

「じゃ、俺は帰るから。執筆頑張れよ。」

わかってるぞ。

夕食は余話の場（前書き）

タイトルの付け方変えようかな……。

最近一話が短くなつてきてる。

夕食は会話の場

「美夏、まだ見てるのかよ。」

美夏はわざわざ渡した時計を何度も見ていた。

「むひ、いいだらう。」

「まあ、確かにいいんだだけじゃ。」

やつぱりあそじまで喜ばれると嬉しきよな。

「美夏はいつもちだからな、由夢また明日だな。」

「はー。」

美夏と別れた後、由夢と俺はお互に無言だった。なんか由夢が不機嫌ぽかつたからだ。

何でなんだ?

「どうかしたのか?」

「別にどうせんけど。」

「でも何か機嫌悪くないか?」

「別に普通です。」

やつぱり時計かな？自分だけ渡されなかつたからか？

今から渡してもいいんだけど、どうするかな？

せつかく一緒に帰つてゐるのに、この空気は嫌だし渡すか。今更じや逆効果かもしれないけど。

「なあ、由夢。」

「なんですか？」

「これ先に由夢に渡しておくよ。」

「えつ？」

空間箱《ボックス》から由夢の名前を彫り込んだ時計を取り出して由夢に渡す。

分かりにくいけど、なんか喜んでる……か？

「家で渡すんじゃなかつたんですか？」

「先に由夢に渡そつかなつて思つたんだよ。悪いからよ。」

「悪くはないですよ。」

そう言いながら受け取る由夢は笑みを隠しきれていなかつた。なんだかんだ言つて嬉しいみたいだな。

「といえば影兄、この事お姉ちゃん達は知つてゐるんですか？」

時計の事か？知るわけ無いだろ内緒にして作ったんだしさ。だから由夢達も知らなかつたんだし。

「転生の事ですか？」

「わかつてゐから。」

「嘘ですね。明らかに他の事考へてたでしょ。ビツサ時計の事じやないですか？」

「何でわかつた！？」

「影兄はわかりやすいんですよ。」

そんなにわかりやすいのかよ。確かにいろいろな人に言われてるけどさ。

「マジか……。」

「ド、どうなの？」

「あくび、アイシアは知つてゐよ。音姉に義之は知らない。」

「やうなんだ。どひこひかへひたとアイシアさんは知つてゐの？」

これは言つていいのか？今は何ともないとはいえ、義之やあくびに関わる事だ。俺が勝手に言つていい事じゃないような気がする。

なら、やつぱり由夢には悪いけど、適当に誤魔化しておくか。

「いろいろあつてな。今日みたいにバラしてたんだよ。」

「ふーん。」

納得はしないみたいだけど、これ以上は聞いてこないみたいだな。

「お姉ちゃんと義兄には話すの?」

「やうだな。いざれは話さないといけないな。」

「やうなんだ。」

「やうだ、これやるよ。今度一緒に料理作らなが?」

「や、遠慮します。義兄達からしたら下手ですし、かつたるいですから。」

「大丈夫だから。俺も教えるし、もつと上手く出来るつで。」

由夢の料理は正直人並みだからな。義兄達と比べたら嫌になるんだろ?。なら少しでも腕を上げてもらつて、たまには由夢の料理食べたいからな。

「や、いいですから。」

「由夢と料理したかつたんだがな。由夢は料理しないし、新しく教えるついでに出来たら楽しいと思つたんだけどな。」

「これは結構本心だ。音姉とはたまにしているけど、由夢とは一緒に

何かする事なんて今まで無かつたしな。

「……少しなら一緒にしても……。」

「本当か?」

「セレまで言つならしょ'つがないですか?」

「なら、今度一緒にしような」

「はい。」

なにか今の由夢でも出来る本格的な料理探すか考えないとな。まあ、人並みになるまで結構上達早かつたし、才能が無い訳じゃないんだろ?けど。

まあ、かつたる星人の所はあるから、進んではしないかもしけないけど。

「あ、そうだ。弁当どうだつた?」

「おこしかつたよ。美夏も気に入つてたし。」

「美夏も食べたのか?」

「はい、気になつてたみたいだし。」

美夏が気に入つてたんなら、大丈夫だろうな。結構ハツキリ言つじ。それに由夢も美味しいと思ってくれてたみたいだし。

ん、家が見えてきたな。

「着いたな。」

「そうですね、私は一度家に帰ってきます。」

「なら後でな。」

今日は晩ご飯も作るとするか。どうせ暇だし、最近晩は作つてなかつたし。

「義之、晩ご飯作るから音姉達来たら教えてくれ。後今日はさくら達早いらしいから、さくら達帰つて来た時も教えてくれ。」

「晩ご飯か!? お前本当にどうかしたのか?」

「どうこう事だよ。」

「いや、蒼影基本作つても一日一回じゃないか。それ以上やる時は、なんか特別な日しかしないだろ。」

そうだったか?

……確かにそうかも。誕生日とかなら作つてたけど、普通は一日

一回だな。どうして晩作うつと思つたんだ？

「確かにそうだな。」

「だろ？何かいい事でもあつたのか？」

「いい事か……。確かにあつたな。今日は俺の事を由夢や鈴花、恋花さんに受け入れてもらえたし、美夏の事もそつだ。」

だから作ろうと思つたんだろうな。結構俺つて単純だな。

「そうだな……。確かにいい事はあつたな。」

「そうなのか、何があつたんだ？」

「内緒だ。」

「なんだそれ。まあいいや。音姉達来たら教えたらいいんだな。」

「ああ。」

さて初めるか。まあ、そんなに時間は使わないつもりだが。そうだな、カレーがなんか丼物が食いたいな。

「材料はつと。肉に玉ねぎはあるけど、ジャガイモとニンジン無いし、カレーは無理だな。」

となると丼物だけど、カツ丼はカツにする肉ないから牛丼にするか。

他におかずでサラダだな。サラダにする野菜は前買はずしたから余

つてるしな。

さて、作り始めますか。

「「おじやめします。」」

「「ただいまー。」」

やくべり達が帰つてきたみたいだな。音姉達も一緒にみたいだし。そろそろ時計取り出しちゃおくか。義之と音姉は知らないしな。

「影兄。」

「どうした由夢?..」

「お姉ちゃん本当に知らないの?..」

「こわなつづいた?..」

「お姉ちゃん影兄の事知つてたよ。偶然独り言聞かれで、『由夢ちゃんも教えてもらつたんだね』って。」

あれ？音姉には教えてたか？

ああ、忘れてた。そいえば転生の事話したな。

魔法の事は話した記憶あつたんだけどな。確か、何で魔法使えるか聞かれた時に話してたな。

「あー、悪い。すっかり忘れてたよ。」

「はあ、影兄結構重要な事なんだから、忘れないでよ。自分の事なのに。」

「悪い。」

「もうこ ciò も。」

「なら、盛るのと運ぶの手伝って。」

「や、かつたることですから。」

.....。眞面目になつたと思つたらかつたるい星人になつたよ。

「なら、今日はいや。向こうで待つてくれ。もう持つて行くから。」

「はーい。」

俺の事を一応心配してくれてるみたいだし、今日まあまづ強く言えないな。

「そうだ、時計取り出さないと。音姉にせんべり、アイシア、義之のはつと。

「よし、時計はOK、料理も大丈夫だな。持つて行くか。」

「影君、手伝つよ。」

「ありがとう、音姉。」

「どういたしまして。せつだ、影君由夢ちやんに教えたんだね。」

「ああ、鈴花と恋花さんに問い合わせられてな。由夢も思つてたみたいだし。

「ゴメンな。秘密じやなくなりて。」

「影君を受け入れてくれたんだよね?」

「ああ。」

「なら、いいよ。少し残念だけど、また一人の思い出作ればいいんだから。」

「そうだな。」

「俺だったらそこまで前向きには生きられないかもな。」

「お待たせー。」

「あ、由夢ちやん。私も手伝つよ。」

「ありがと、」とこます、アイシドさん。」

「今日は牛丼かー。相変わらず美味しそうだね、蒼影君。」

「ありがと、」とへり。んじゃ、食べよひせ。」

「やつだね」

「「「「「」ただそれも。」「」「」「」「」

「んー、やっぱり蒼影君の料理は美味しいね。」

「だよね、あたし蒼影君の料理なじこへりでも食べれひるよ。」

そくりにアイシアが言つ。ありがたいけどアイシア、いくらでもは無理だろ。絶対いつか飽きるから。やっぱりたまに食べたり、いろいろ人の食べるからいいんだし。

「やつぱり蒼影には勝てないな。」

「別に料理に勝ち負け無いだろ義之。」

「影君、あまり作らないのに何でこんなに上手なんだ？？」

「影兄だからじゃないですか？」

「おい、由夢。それはないだろ。」

「事実だから。影兄は影兄だもん。」

「あ、そうだ。蒼影君、弁当美味しかったよ。ね、やべり。」

「うん、ありがとね。」

「どういたしまして。」

やくら達も喜んでくれたみたいだな。つて事は、音姉だけか。悪い事したな。

「やうだ、聞いてよ由夢ちゃん。影君ったら酷いんだよ。」

「影兄が何かしたの？お姉ちゃん。」

まさか喧の事。……でも止めるねえ。俺が悪かつたわけだしな。

「影君つたら、私の弁当にワサビやカラシ入れてたんだよ。」

「影兄、もしかして朝の間違つたんじや。」

「うへ、その通りだ。」

「蒼影君、イタズラは駄目だよ。」

「蒼影君、あたしにはしないでね。」

「わかつてます……。」

由夢、やくら、アイシアの言葉が刺さる。あなた三スあるとは思わ

なかつたしな。

「まあ、やいまでこことよ。影痴も謝つてくれたし。」

その後は、普通の会話をしながら晩ご飯を食べた。

ただちに、音姉。止めるなら初めから言わないでくれよ。

「…………」

みんなが晩ご飯食べ終わつたし、時計渡すには一度いいな。

「ちよつと渡す物あるから待つてくれ。」

「蒼影が？」

「これだよ。後ろに名前が彫つてゐるから、すぐに分かると彫つよ。」

「綺麗だねー、でも蒼影君これ高かつたんじやないの?」

「そんなこしないよ。一応自作だし。」

実際に使つた金は材料に使つた金属の代金くらいだからな。

「さすが影君だね。」

「だよね、蒼影君ありがとね。」

さくらり、音姉はあまり驚いてないみたいだな。

「音姉、さくらさん何でそんなに普通なのー?」

「そりゃだよ、さくら。この時計自作っておかしいでしょ!?.」「残りは驚いてるな。普通は、この一人の反応が普通なんだけどな。そいえば、鈴花達も驚いていなかつたな。

「だつて蒼影君だもん。普通だよ。」

「やうやう。でも由夢ちゃんのは?」

「私はわざわざこましたから。」

「俺がおかしいのか?」

義之は普通だと思つた。むしろ驚いてなかつたり、俺だからで納得する方がおかしいと思つ。

「大丈夫だつて、義之。多分慣れるさ。」

「慣れたくないねえよーしかもまた何かするつもりか!」

「何でだよ。」

「慣れるつて事は何か起こらないと無理だろ。」

「確かに。でも安心しろ何もないから。」

「本当か？」

「ああ。」

今はだけどな。文化祭になつたらこりこりやめつもつだし。

「えじや、俺は部屋に戻るから、後片付けは義之頼むな。」

「お、おー。」

義之が何か言つてゐるけど無視だ無視。部屋に戻つてやりなさいといけない事あるしな。

夕食は会話の場（後書き）

今回は朝倉由夢に来てもらいました。

「えつと、『んばん』はでいいのかな？」

いんじやね。じゃ、早速寒は音姉にも転生バレました。

「バレてる人多くないですか？」

いんじやね？ ビリせ最後にはヒロイン全員バラさないといけないんだしや。

それに由夢だつて蒼影の秘密知つて嬉しかつただろ？

「ま、まあ。少しは嬉しかつたけど……。」

ならいいだろ。『』の際言つが俺はシリアル苦手だしさ。

嫌いではないんだけど、読んだ又は見た後のあの気持ちがなあ……。
なんかじつ……気分沈むじやん。

「わかりますけど、少しは入れるべきと思つただけど。」

まあまあ。ただシリアルは考へつかないから、少なくなるな。

「才能の差ですね。」

つぐ。この話は終わりだ終わり。

「逃げましたね。」

でさ、これからなんだけど、原作の話少なくなつそつなんだよな。

「オリジナル書くの？」

まあな。正直原作の話ならやれば分かるし、どうせなら連つ話したいじやん。まあ、好きな話は入れるけど。

「まあ、変にしないようにね。」

出来る限りな。俺の小説は自分で読むつもりだしな。

「それ、恥ずかしくないんですか？」

別の人と考えて読むからな。それでも少し恥ずかしいが。

「なんですかそれ。」

今回はこれくらいかな？他の事話すとなんか長くなつそつだしさ。

「なら、私はもう帰りますね。最後に読者さん、いつもありがとうござります。」

お気に入りもあと少しで100だしな。欲を言えば、いろいろな人から感想欲しいが。

「今でももうひとつあるでしょ。」

まあ確かにありがたい。

いつも感謝しつぱなしだな。

「まあ、これからも頑張つたら見てくれる人は見てくれるでしょ。」

だな、じゃ次の更新で会いましょう。

「さよなら。」

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム（前書き）

今回は少し早めに投稿

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム

「おはよー、音姫。」

「おはよー、まゆき。」

昨日と同じくまゆき先輩がやつてきた。結構朝はまゆき先輩と行く事多こよな。音姉がいるから当然なんだけどさ。

「蒼影に義之君もおはよつわん。」

「おはよいわ。」

今更なんだけどなんで俺は呼び捨てで、義之は君なんだ？

まあこいんだけどさ。まゆき先輩に時計渡さないとな。後は、雪月花に委員長、フィル、ナツリ、ほたん後涉に杉並こひな今日渡せるから、残りは美秋に勇斗か。

美秋と勇斗は近い内に家に行かないとな。

「おはよー、蒼影ー、無視は無いんじゃないの？」

「無視じゃなこつすよ、考え事してただけですから。おはよいわ。」

「はー、おはよー。」

「あ、まゆき先輩、これ渡します。」

「ん？ 時計だね、どうしてあたしに音姫達にあげればいいの？」

「音姫達には渡しましたか？」

「へー、蒼影って金持ちなんだね。」

「なんでみんなやつなるんですか。手作りだから金はかかってません。」

「いや、普通やつ思ひでしょ。しゃれいかにも圓やつだしね。ね、音姫。」

「うん、私も初めもやつた時は驚いたんだよ。」

「だよね。まあ、作れるのも凄いと感ひやが。」

「別にやつでもないですよ。それに名前彫つてると受け取つてもらわないと困るんですけど。」

「なら、もうやつね。あつがと、蒼影。」

受け取つてもらえてよかつた。今更だけど。受け取つてもらえない可能性あるんだよな。

結構凝つたの作つたし。他のは一から作つてもいいまでじゃないし。今度作る時計も、体験で作れる時計より少し凝つたくらいだし。

まあ、雪月花は小恋以外はもらつてくれただけど。委員長は微妙だけど、押しに弱いしな。美秋やフィル、ナツミは普通に受け取つ

てくれるな。

「高坂先輩、お姉ちゃんから聞いたんですけど、影兄が迷惑かけてすいません。」

「あー、いいよ。蒼影にはちゃんとお詫びしてもらひしね。」

「そうですか。」

「そいえばさ、蒼影。これ作るのどれくらい時間かかったの。」

「一つ二日位だったような。普通よりパーツ多かつたし。普段作るのは、三時間くらいだし時間かかつた方かも。」

実際時計のパーツが多いから、バラバラにならないように一日でやりがいい所までやらないといけないから、大変だったな。

本職の人気がどうなのかはほとんど分からんだけだ。実際本職の人は、どのくらいで作るんだろ。パーツ多かつたら、一度にやりないと無理なような気がするし。

まあ、本職にするつもりないから。

「よくやるわね。」

「まあ、趣味の部分が多いですから。じゃあ、俺達はこっちだから。行くぞ義之。」

話してゐる内に学園に着いたな。やっぱり誰かと話してると、時間が早く過ぎる気がするな。

「ああ。」

「今日はみんな早いな、蒼影。」

「昨日俺達が早かつただけじゃないか？」

先に委員長に渡すとするか。

「俺、委員長に用があるかい。」

「そいえば蒼影は委員長と親しかったな。小恋達にはいつも渡すんだ？」

「あいつらなら、後でも時間はあるだろ。鞄はお前持つておいて。」

「確かにな。てか何で俺が！？」

「よひべ。」

「ちよ、ちよつと待て。」

「うこう寺はやつぱり無視に限る。」

「よひ、委員長。」

「蒼影、今日はいつも通りなのね。」

「当たり前だ。いつも早起きなんて俺には出来ないからな。」

「まったく、威張る事じゃないわよ。」

「はは、悪いな。そりそりこれもうつてくれないか？」

「これって時計？高そうだけど、もしかして蒼影が作ったとか言わないわよね？」

「あおっ！初めて分かつた人がいたよ。まあ、半信半疑みたいだけど初めてだから嬉しいな。」

いや……分かるのがおかしいか？

「委員長正解。俺が作ったんだけど、何で分かつたんだ？」

「蒼影、たまに有り得ない事をしてるから何となくは分かるわ。」

「有り得ない事って……。」

「後は、何か隠してたみたいだね。これとは別に隠してる事もあるみたいだけど。」

結構鋭いな。しかも転生とかの事も気付いてるみたいだな。流石に内容までは分からぬだろうけど

俺つて隠し事出来ないのか？鈴花達にもバレてたみたいだし。

「それはだな……。」

「別に問いただしたりはしないわよ。」

もうこいいかな。バレてるし、今度委員長の家行く時に話すとするか。

「あー、なんだ。今度委員長の家に行った時に話すよ。」「

「そう、わかつたわ。後、時計ありがとう。大事にするわ。」「

「ああ。じゃ、この後の文化祭準備頑張れよ。」「

「ええ、蒼影にも働いてもらひますよ。」「

「分かってるって。んじゃな。」「

「ええ。」「

ギャンブルが堂々出来るし、文化祭はもうひん働くつもりだ。

今の所決まつてるのは、ギャンブルで勝てば割引、負けたら割増のメニューだな。一応普通のも作るが、量はギャンブルメニューの方が多いし、客も面白半分で頼みそうだな。

俺だったら絶対頼む。イカサマ出来るしな。

「おー、蒼影ー!」「

「なんだ涉?」「

「蒼影がプレゼントくれるって本当かー?」「

いや渡すけどさ、なんか違うくない?」「

「なんか悪い。言つてしまつた。」

「どうせ、渉に見られたとかだろ?」

「まあな。」

渉の性格なり騒ぐだらうしな。

「ねえ、蒼影。私達にもあるの?」

「ああ、小恋達にも用意してゐよ。杉並にもあるんだけど……」「波柳よ、俺ならいいこにいるぞ。」「一度いいな。」

「「杉並、いつ来たんだよ!-?」」

凄いな、二人共息ぴつたりだ。

「板橋、桜内よ、氣にするな。」

「いや、普通氣になるだろ!-?」

「あ、これな。杏に茜、小恋のつと。やいえば、ナツリ達はっ。」

「あ、ありがとお、フィルちゃん達ならまだよ。」

「ありがとお、フィルちゃん達ならまだよ。」

「綺麗ね、大事にするわ。あとほたん達なら遅刻だと思つわ。朝ナツヒと居たから、連れ回されてるんじやないかしぃ。」

ナツミが……。学園に来て、一田田なのに遅刻つてファイルとほたんが可哀想だな。

「杉並はこれな。」

「ふむ……、凄いな。有り難く使わせてもらひとこよひ。」

「なあ、俺のは!?」

「あるから、落ち着け。ほりよ。」

「おー、すっげーーサンキューなー!」

「あ、ああ。」

はあ……、渉のせいで結局疲れたな。

「おくれたのやー。」

「「すいません。」」

ナツミ達が来たみたいだな。今は文化祭の話し合いで中だし、先生は

いないから怒られはしない。

来週にはもう本格的に準備が始まるからな。

「今、メニュー決めてるから、鈴木さん達も参加していいんだい。」

「わかったのやー。」

「わかりましたー。」

「わかったわ、ならサンディッシュにクッキーも菓子パンとかでいいんじゃないかしら?」「

「サンディッシュにクッキーはいいけど、菓子パンなんて誰が作れるのよ。」

「多分蒼影なら作れるつす。」

「本当? 蒼影。」

「一応な、ただ何個も作るには人手は必要だからな。長持ちするやつも作れるから、文化祭前に少し作れば大丈夫かもな。」

まあ、どっちにしろ量は作れないな。」

「なら、サンディッシュにクッキー、菓子パンは決定ね。他には?」

つたぐ、面倒な事任せてくれる。

「おはよー、蒼影。」

「ああ、おはよー。」これはファイル、ナッシー、まだなんにもな。

「ボクに? なになに?」

「ナッシーもやむへ。」

「これは時計ね。」

「うそ、他のメンバーにも渡しててな。」

「もう、もう」とう。」

「あつがとうなのセー。」

ナッシーとせたんはやつぱりすんなり受け取ったな。

ファイルはじつしたんだ?

「ありがとー、蒼影大好きー。」

「うわー。」

れつきまで俯いてたたファイルの顔を覗き込もうとしたらいきなり抱きついてきた。危ねえ、あやつく転けるといひだつたよ。

まあ、大好き言われるのは嬉しいんだけど……、今学園だし恥ずかしいな……。

「やじつ、話し合に参加しなさい。」

やつぱり委員長に怒られたよ。まあしょうがないんだがさ。

「はーー。」

「了解。そろそろギャンブルだけど、ポーカー、ファイブカード、ブラックジャックはやつぱいるよな。」

「それは、あなた達が決めていいわ。私はあまり分からぬいし、蒼影が何とかして。」

「うーーす。そっちも決まつたら教えてくれ。」

「わかったわ。」

トランプでギャンブルつてなにがあつたけなー?

「じゃ、決めますか。」

「やうすね。まずは蒼影の言つた三つすね。」

「でも他に何があつたのさ?」

「無いんじゃないかな?ボクは知らないよ?」

確かにこれ以外にトランプのギャンブルは無いよな……。面倒だしこれでいいか。後はなんかのサイトで見たセブンポーカー入れて四つでいいや。

「なら今の三つにセブンポーカーだな。」

「蒼影、セブンポーカーってなに？私分からないよ……。
「そつか、小恋以外には誰かいるか？」

分からるのは小恋、杏、茜、フィル、ぼたん、義之、涉か……。

「なら、ナツミ、鈴花、杉並、俺でやつてみよつぜ。」

「別にあたしはいこうすよ。」

「ナツミもなのぞー。」

「俺もいいだらう。」

「んじゃ、知らないやつには説明するかひ。」

セブンポーカーは、ポーカーと似ていて初めに五枚でなく七枚引いて、出すときに五枚選んで役を作る。

役はポーカーと同じだ。

「つて事だ。まずは俺と杉並、鈴花とナツミでやるか。」

「いいだらう。」

「なら杏シャツフル頬むな。」

「わかつたわ。」

さて、手持ちは……なるほどね。

ダイヤが6、9ハートが6、8クローバーが6、9後はjokerか。なら、6、joker以外を変えて。

「へー、なんか面白そうじゃんか。」

「渉も後で義之とやつたら?」

「いいな! やろうぜ!」

「なんで俺なんだよ。まあいいけど。」

「じゃあ、小恋ちゃんは私とねえ。」

「ええっ、月島はいいよお。」

「いいからいいから。」

「おっ、6四枚、joker一枚、A一枚。完璧だな。」

「俺はいいぜ。」

「ふむ、じちらもいいだろ?。じちらはストレートフラッシュ。ハートの9、10、J、Q、Kだな。」

ストレートフラッシュか。ロイヤル近いじゃん。まあ、ファイブカードはロイヤルの上だから問題ないが。

「蒼影、大丈夫?」

「ファイル大丈夫だから。俺は6四枚、jokerでファイブカード

な。」

「なぬつ、負けか。」

杉並に勝つのはやつぱり嬉しいな。

「ナツミあたし達もやるですよ。」

「もううんなのさー。」

「いえ、ナツミ達仲良くなるのは早くない? もつあくびに名前じやん。
女子は凄いな。」

あ、そうだ。

「委員長少しいいか?」

「何かしじら?」

「明日か明後日委員長の家に来ていいくか?」

「…………明日なら大丈夫よ。来る道の途中で待ってるわ。」

「了解。」

「これで一人にも渡す事が出来るな。」

今日は特にすること無いし、暇だらうからその分明日が楽しみだ。

文化祭準備 メニュー決めとカードゲーム（後書き）

なんか話がワンパターンになりそうだ。

「考え無しに書くからっすよ。原作までが大變っすね。」

「だよな、原作まであと何話かかるんだよ。」

わからん。ただ書いてる時は楽しいから、オリジナル増やしてしまうんだよ。前言わなかつたか？

「さあな。てか俺一度目だけど、何でなんだ？」

言いたい事が有つてな。

「なんだ？」

なんで技能作成『スキルメイク』使わないんだよ！意味ないだろ！

他の世界にも行くのに、いきなり使いこなせると思つてんのか！

「それ、お前のせいだろ？がー！てか、思い付かねえよ。お前考えるなんて思いつかないんだよー！」

無理だー！特に攻撃や防御用とかな。大きくでなく、使用法に分けるなんて思いつかないんだよー！」

「俺もだよー！」

「まあ、落ち着くつす。」

悪い鈴花。

「でも確かに勿体ないつすよね。」

だよな？

「でも、どうすんだよ。まさか読者さんに考えてもいいつもりか？」

.....。

「図星みたいつすね。」

「あのな、感想やアイデア求めすぎたら。」

だってわ、感想は嬉しいシャイデア思いつかないんだよ。

「まあ、それは読者次第つて事つすね。」

「だな。」

じゃ次な。

「まだあるのかよ。」

単純な事だ。今度から後書きに「一人くらい呼ぶから。

「やっぱけるんつすか？」

なんとかな。まあ今回はそれだけだ。お疲れ様。

「分かつたつす。じや蒼影、t o u m a y u ひやんてアイデア考
えるつすよ。」

……、読者さん頼む。

「結局読者に協力頼むのかよ。」

まあな。本当は止めた方がいいんだろうがな。

「はあ、読者さんまた次の更新で。」

休日、委員長の家の息抜き（前書き）

前回の後書きの事ですが、期限はないので協力お願いします。

休日、委員長の家の息抜き

「蒼影君、今日は早いんだね。」

朝起きると姉と由夢、さくらがいた。義之とアイシアはないみたいだな。

「まあ、用事あるしな。義之とアイシアは？」

「一人共まだ寝てるみたいだよ。」

「あれ？ 影君、どこかに行くの？」

「ああ、少しね。」

「あ、影兄。帰りに何か買ってきてね。」

「気が向いたらな。」

何度も買つたら、金が無くなるつての。この前も買つたしさ。実際金を作るのはやりたくないし、あまり金無いんだよ。

実際金の収入源は小遣いとたまにやるバイトだからな。

「んじゃ、そろそろ俺は行くから。」

「うん。ボクもそろそろ行こうかな。」

「それとも何かあるんですか？」

「うふ、ボクは学園で仕事があるから。」

「えつー…わくらさん大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。そろそろ行かないといけないけどね。じゃあ、ボクは行くね。」

「氣をつけとください。わくらさん。」

「じゃ、私も美夏と約束ありますから。」

なるほど、だから私服なのか。いつもはジャージだし、おかしいとおもった。

「由夢りやんも？」

「うふ。」

「わうなんだ。行つてらっしゃい、由夢りやん、影君。」

「ああ。」

さて麻耶も待つてるだろうし早く行くか。

……？なんで麻耶かだつて？私生活だし、そんな気分だからだ。

麻耶は来てるかなつと。

……おひ、あれだな。勇斗一緒に見たいだな。

「あ、お兄ちゃん!」

勇斗が気付いたみたいだな。麻耶も気付いたし、行くか。

「よひ、 勇斗、 麻耶。」

「おはよひ、 蒼影。」

「おはよう、お兄ちゃん!」

「おひ、 相変わらず元気だな、 勇斗。（ナガナガ）」

「えへへ。」

やつぱ弟とかはいには。俺は由夢がいるけど、年の離れた兄弟はないからな。

「蒼影、 勇斗行きましょひ。」

「はーー。」

「そいえばさ、綾子さん元気か？」

「ええ、元気よ。前まで体調崩してたのが嘘みたいよ。」

「そうなんだ。」

麻耶と勇斗のお母さんの綾子さんは体調崩してたんだけど、今は大丈夫みたいだ。ちなみに、力を使ったんだけどね。

名前は病原崩壊《ウイルスダウン》って言って回復用の力なんだけど、病気専用。

これとは別に傷口修復《ヒール》ってのは作ってる。これは、病原崩壊とは別で身体的な傷などを即死で無い限りは治すせる。

なんで両方治せる様にしなかったかと言つと、せっかく作れるんだし、使う方法によつて分けたかっただけだ。

「ねえ、美秋お姉ちゃんがお兄ちゃんが来るの楽しみにしてたよ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「何度も蒼影の家に行こうとしてたわよ。」

「あー、そうなんだ。」

最近まったく会ってなかつたからか？まあ、会いに来るくらい別にいいんだけどな。

「そうよ、いいお姉ちゃんなんだけどね……。」

「まあ、いんじゅね？」

「はあ。」

「どうしたの？お姉ちゃん。」

「何もないわよ。」

やつぱり麻耶達は仲がいいんだな。勇斗はまだ小さいのに麻耶の事心配しているし、麻耶は心配かけないよつにしてるし。

美秋も一人の事大事にしているしな。やつぱり仲のいい兄弟、姉妹つてのはいいな。

てか俺の周りつて結構そういうの多いよな。音姉達もだし、鈴花達もそうだしな。

「お兄ちゃん、早く行こうよ。」

「ああ、ゴメンな。」

いつの間にか足が止まつたみたいだな。

「そいえばさ、麻耶後で美秋と二人で話せる？。」

「ええ、勇斗をお母さんにお願いしたら出来るけど……。」

「なら、後で頼み。少し話があるしな。」

「……わかったわよ。」

「わりいな。」

今日は麻耶にも教えるつもりだしな。何か気付かれてるみたいだしな。

つと、アパート着いたみたいだな。いや、マンションか？

どうでもいいんだけど、アパートヒヤンションひとつひとつ基準で分けてるんだろう。

「ただいまー。お母ちゃん、美秋お姉ちゃん、お兄ちゃんが来たよー。」

「ただいま。」

「お邪魔しまーす。」

「蒼影君、久しづりだね。」

「そうだな、美秋元気だった？」

「うん、でももう少し会こに来てくれてもいいの。」

「『メソメソ』、いろいろあつくな。」

「お姉ちゃん、蒼影が困つてゐるから。」

「麻耶ちゃんが言つなり……。」

「近い内にまた来るからだ。」

「約束だからね。」

「蒼影、まずは中に入つて。何か用意するわ。」

「ああ。」

「といえば最近寒くなつてきたよな。相変わらず桜は咲いたままだけど。」

「いひつしゃい、波柳君。」

中に入つたら、綾子さんが出迎えてくれた。麻耶の言つた通り元気みたいだな、

「お邪魔します、綾子さん。」

「私は少し出るから、よろしくね。」

綾子さんどうか行くみたいだな。勇斗どうあるか……、まあ美秋に任せたらいいかな？

「ねえ、お兄ちゃん。何して遊ぶ？」

「そうだな……。遊ぶ前にこれ渡すよ。こいつが勇斗でこっちが美秋のな。」

「時計？」

「ああ、大事にしてくれよ。」

「うん。」

実際勇斗はあまり分かつてなさそうだな。まあ、勇斗なら雑には扱わなさそうだけどな。

「ありがとうね、蒼影君。大目に使つかうね。」

「ああ、そうだ。麻耶に少し用事があるから、勇斗少し美秋と遊んでてくれないか？」

「えー。」

「すぐに行くから。」

「はーい。」

「勇斗君、先に一緒に行こうか。」

美秋が勇斗を連れて行ってくれた。さてと、麻耶に話すとしますか。

そいえば、勇斗って五歳なんだよな。なのにしつかりしてると。

てか、俺五歳に時計あげたのかよ。

「で、蒼影話つて何かしら？」

「麻耶が、気付いてただろ？話そつかなつて思つてな。」

「別に無理に話さなくともいいわよ。」

「いや、無理はしないから。わざと、まずは今から話すのね、嘘つぽこけど本当だから。」

毎回同じような事言つてるような気がするな。

後は前と同じように麻耶に話した。これに関しては、美秋、美夏にかけた力についても教えておいた。

「……本当なの？」

「ああ、実際に美秋だつて誰にもバレてないだろ。後は……。」

麻耶に実際に見せるために、空間箱《ボックス》を使って時計作りに使う金属を買つ時に一緒に買つた鉄を取り出した。

そして、その鉄を金属操作《メタルアート》で加工してプレスレットを作つた。

「こちな感じだな。あ、これプレゼントな。」

「あ、ありがと。本当にだつたのね。」

「当たり前だ。こんな嘘つくな意味なんかないからな。」

「確かにそうね。蒼影、ありがと。」

「なんで礼言うんだ？」

礼を言うのは俺の方だろ。だって俺の言つた事を信じてくれて、今も普通に接してくれてるんだしな。

「お姉ちゃんがロボットだつてバレない為に、いろいろ協力してくれてたんだしょ？だからよ。」

「それは俺がやりたかったからだよ。それに礼を言うのは俺の方だよ。」

「そう。他に知ってる人はいるの？」

「結構いるな。さくらにアイシア、音姉、由夢、鈴花、恋花さん、美秋、美夏だな。」

よくもここまでバレたよな。しかも皆が普通に接してるんだから凄いよな。

「あのねえ、重要な事なのに何でそんなに知られてるのよ。」

「大丈夫だつて。麻耶を含めてみんな信用出来るしさ。」

「そういう事じゃないでしょ……。まあ、いいわ。勇斗が待ってるから行きましょ。」

「あ、ああ。」

しかし上手く行き過ぎだらう。全員が全員すんなり受け入れてるん

だから。

もつもしなんかこいつねえ……。

「勇斗、お待たせ。」

「あ、お姉ちゃん、お兄ちゃん。あのね、美秋お姉ちゃんがお昼食
に行こいつて。」

「俺も?」

「やうよ、蒼影君も一緒にに行こいつ。」

「俺はいいけど……。」

「私はいいわよ。」

「なら決まりね、勇斗君行こつか。」

「うん。」

「なじ、こつもの喫茶店でいいわよね?」

「いいんじゃないかな?」

「早く行こよ。」

麻耶の家を出て街にある喫茶店に向かつ。その間、勇斗は麻耶と美
秋と話していた。俺はたまに話すくらいだな。

そいえば由夢と美夏出掛けてるんだよな。もしかしたら由美つかも
な。

休日、委員長の家の息抜き（後書き）

今回は生徒会の一人に来てもらひたぞ。

「」んにしほな、風見学園生徒会長、朝倉音姫です。」

「やつほ、生徒会副会長高坂まゆきだよ。」

「でも、何で今日は私達なの？」

今回は一人共ほとんど出番無かつたからな。

「それはあなたのせいでしょ。とこより出番無い入ならまだ居るんじやないの？」

まあな、正直誰出すか迷つたよ。だから気分で適当に決めた。

「そんな理由？」

ああ、それに姉妹やまゆき先輩はまだ一度も出してないし、セシットで出しやすそうだからな。

「あんたねえ……。それよりも、また蒼影バレたじゃない。」

「でも今日はバラしだったよね。」

ああ、だつてさロボットって事バレないのに限界あるじゃ、すつとバレしてなかつたら怪しむでしょ。

「確かにね、でもあたしが出でていの？」

ああ、まゆ先輩には近い内バレるからな。

「ネタバレしていいの？それに影君大変になりそうだよね。」

ネタバレにはならないだろ。結果全員にバレうすって蒼影も決めるし、こつとかは言つてないんだから。

「わうかもね、音姫は心配しそなんだよ。」

「でもー。」

まあ、話を戻して今回なぜ前変えようと思つんだ。今の名前呼びにくらいした。

「それは分かるけど、何で？」

一応読んでくれてる読者さんが困らないようにとかな？

急に変わつて分からない時俺もあつたからな。

「わつか、私はここと思つよ。」

サンキュー、まあ今回はそれだけだ。次回から後書きは雑談メインだな。

「あたし達の山番ひやんと増やしてよ。」

分かつてゐる。じゅまた次の更新で。

人が増えると面倒だよな（前書き）

なんとか間に合つた。

人が増えると面倒だよな

やつぱり街は人が多いよな。人多いのって実は苦手なんだよな。

「あれ？ 影兄ですか？」

やつぱり、会つたな。休みだし、知り合いでには会つと思つたけどさ。声の方に振り返ると、そこには……予想通り由夢と美夏がいた。まあ、二人だけじゃないんだけどな。

「あれ？ 蒼影に沢井、どうしたの？」

「」んにちは、朝倉先輩、高坂先輩。」

「」んにちはー。」

「少し遊んで、昼飯食べに行くといふですよ。」

「蒼影達も何だ。」

「まゆき先輩達もだつたんですか？」

「まあね。」

「よかつたら一緒にどうですか？ 麻耶ちゃんの先輩方なら歓迎しますよ。」

「でも、悪いんじや。」

「美秋が言つてゐるんだからいいだる、音姉。」

「でも影君……。」

「あつひじやもひ仲よきひだり。」

音姉と話してると、残りのメンバーが会話をした。麻耶と美夏、由夢、勇斗が話していく、まゆき先輩は美秋と話していた。

「なあ、沢井。沢井と蒼影は仲がよかつたんだな。」

「私も知りませんでした。影兄は家でいつも話しませんし。」

「蒼影とは昔知り合ひたのよ。それからは、たまに遊んだりはしてるわね。勇斗やお姉ちゃんもいるから。」

「お兄ちやんはいつも優しいんだよ。」

「蒼影は確かに優しいよな。」

……仲良くなつてゐるはいいんだけど、話題の中心が俺つてなんなんだよ。

俺がいなかつたらいいんだけど、田の前にいるんだから……。かなり恥ずかしいんだけど。

「まゆきさん、麻耶ちゃんは学園でどうへ。」

「沢井は眞面目だし、特に問題ないから安心だよ。ただ、蒼影や杉

並達、雪村達がいるからね。そこは心配だね。「

「やつか……。麻耶ちゃんらしいね。蒼影君がいるなら大丈夫だよ、まゆきちゃん。」

「あの一人は仲良くなるの、早すぎだろー? まゆき先輩はいつも通りに話しているし、美秋はまゆきちゃんつて…

く、くくっ。ヤバい笑いが堪えれないって……。まゆき先輩がまゆきちゃんつて……。

「蒼影、今何か言つたかしり?」(一ノ口)「

「い、いや。別に何も言つてないから。」

危なかつた。まゆき先輩勘が鋭すぎだろ。しかも顔が笑つてゐてが笑わないとか……。何か黒いオーラも後ろから出でたし。

「あはは、なら一緒に行こうかな。」

「なら、行こつか。おーい、話は纏まとだぞ。」

「やう、なら行こつか。」

「早く行こつかよ、お兄ちゃん。」

「分かつてゐつて。」

勇斗に引つ張られながらも、なんとか歩く。後ろからはみんな着いて来てるみたいだし、大丈夫か。

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

えっと、俺に勇斗、麻耶、美秋に美夏、由夢に音姉、まゆき先輩だから……八人か。

「八人です。」

「いらっしゃいませ。」

「じゃ勇斗行こうか。」

「うん。」

音姉達も来たな。席順は奥から美秋、勇斗、麻耶、美夏でテーブルを挟んで奥から由夢、音姉、まゆき先輩、俺だ。

「俺は決めたけど、みんなは何頼む？」

俺はカツ丼にジンジャーエールだ。炭酸はジンジャーエールくらいしか飲めないんだよな。

「私は影兄と同じでいいです。どうせカツ丼でしきつですから。飲み物はオレンジジュースでいいです。」

「なら、あたしも由夢ちゃんと同じでいいよ。」

「美夏も同じだ。」

「なら私はナポリタンかな。飲み物は由夢ちゃんと同じで。」

「私も音姫ちやんと同じにするわ。」

あれ？ 美秋いつの間に音姫と親しくなった訳？ いや、いいけど。

「私もお姉ちゃんと同じにするわ。」

「僕はこれ。」

勇斗は子ども用のうどんだな。

「あ、すいません。注文いいですか？」

「はい、何でしょう。」

「カツ丼四つにナポリタン三つに子どもうどん。飲み物にジンジャーハーレー一つ、オレンジジュース六つで。」

「かしこまりました。」

「てかせ、二つの間にそんなに仲良くなつてんの？」

「さつきよ。麻耶や美秋さんもいい人だしね。」

「それに麻耶ちゃんには蒼影君達の事を気をつけでもらわないといけないからね。」

「それはないんじやないか、音姫。」

「お待たせしました。」

来たみたいだな。

「……………」

「てかわ、どうして音姉とまゆき先輩は由夢達と一緒に？」

「あたしが音姉を誘つたのよ。で、街に行つたら由夢ちゃんと美夏がいたからね。」

「音姫先輩とまゆき先輩はいいやつだからな。」

「まあ、そんな事で仲良くなつたから、一緒に街を回つてたつてわけ。」

「そうなんだ。」

なんか原作に比べたら人と人の仲がかなり親しくなつてるよな。

「勇斗、口周り汁付いてるだ。」

勇斗の口に付いている汚れを取つてやる。勇斗はよくすぐつたやうにしているな。

「ありがと、お兄ちゃん。」

「なんかこいつ見てると、昔の影君と由夢ちゃん、義之君見てるみたいだね。」

「へー、昔の蒼影達ってどんなだったの？」

「美夏も氣になるわ。」

昔の由夢達ねえ。音姉も覚えてるんだな。

「私も氣になるわね。」

「私も氣になるわ。」

麻耶に美秋も氣になつてゐみたいだな。俺は別に話してもいいか。

「義之はさうでも無いけど、由夢はかなり変わったよな。」

「うん、そうだね。」

「や、そんな事ないですよ。別に変わってません。」

「昔はお兄ちゃんつて呼んでたのにね。」

「やうなのか、由夢？」

「由夢さんもそんな時期があつたのね。」

「美夏、 麻耶先輩。」

由夢も焦つてるみたいだな。まあ、お兄ちゃんなんて呼んでたのをバラされたら恥ずかしいか。

音姉も言つてみるか？面白くなりそうだし。

「でもや、変わったのは音姉もだよな。」

「え、影君ー。」

「昔の音姫ひやんはどんな子だったのかしぃ。」

「ごまと違つてかなりクールだったよな。」

「影姫……。なんでもういたやうの……。」

「音姫が？あはは、今じゃまったく考えれないわね。」

「でも、蒼影はよく覚えてたわね。」

「まーな。」

結構小さい時は衝撃的な事多かつたしな。

「蒼影つて昔はじっかりしてたんだ。」

「まゆき先輩はつて何ですか。」

「その通りの意味よ。」

「でもまゆき先輩、蒼影は頼りになるぞ？なあ、麻耶。」

「わづね。」

「おお、美夏と麻耶は俺の味方みたいだな。」

「まあ、わうなんだけどその分ねえ。」

「わかります、まゆき先輩。影兄つてば本当に困るんですか？」

「おい、こいつ。由夢は絶対さつきの仕返しだらうが。

「こいつをまー。」

ん？ 勇斗が食べ終わつたみたいだな。財布の中身は……、ああ一結構余裕あるし大丈夫か。

八人分で六千円か。結構安くすんだな。

他の人も食つてるし、そろそろ出ないとな。

「それなら出ようぜ。」

「あ、うん。」

「なら、私が払つてくるね。」

「美秋、俺が払うから大丈夫だよ。」

「え、でも。」

「いいからいいから。音姉達連れて先に出ていいよ。」

「なら、お願いするわ、蒼影君。」

んじや、とつとと払いますか。

支払いを終えて店の外に出ると、みんなが待っていた。

「いらっしゃった?」

「別に奢つますから大丈夫ですよ。まゆき先輩。」

「いや、悪いでしょ。」

「やうだよ、影君。私も払うよ。」

「いいって。俺も男だしね。毎回は無理だけど、たまにはね。」

「なら、お願ひしようかな。ねつ、音姫。」

「うん。」

よかつたな、払った後に金もらうとか恥ずかしいしな。

「で、みんなこれからどうする?俺は帰らうと思つた。」

「私達も帰るわ。」

「またね、蒼影君。」

「あたしも帰るわ。」

「美夏も帰るとこよつ。またな、由夢、音姫先輩、蒼影。」

みんな帰つたな。音姉達も帰るだらうし、一緒に帰るか。

「じゃ、私達も帰り、影君、由夢ひやん。」

「はい。」

三人で帰るのって初めてじゃないか？いつもは義之がいるし、音姉は生徒会長だしな。

「ねえ、お姉ちゃん。私達が三人で帰るの初めてじゃない？」

「そうだね。たまにはこいつのもいいね。」

由夢も同じ事考えてたみたいだな。多分音姉もそうだろうな。

「そうだな。今度三人でどこか行くか？義之達には悪いけど。」

「それもいいね。」

「後が怖そうだね。」

これからもこんな日常が続いてくれるだろうし、頑張って生きていくか。

人が増えると面倒だよな（後書き）

さて、今回のゲストは。

「ナツミ・キヤメロンなのやー。」

「ほたんよ。」

「ボクはフィル・イハートだよ。」

つて事で、ぱすてるチャイムメンバーに
来てもらつたぞ。

「ねえ、ボク達出番少くない？」

「そうよ、私達も出番が欲しいわ。」

ん——、正直ほたんつて杏と彼つてるからな。

「確かに似てるのさー。」

「それを何とかするのが黎白の仕事でしょ。」

そつなんだけど……。まあ、何とかするわ。出来る限りみんなを
出したいしな。

「ボクは蒼影と一緒にだつたらいいよ。」

分かつてゐるから。ぱすてるチャイムメンバーは好きだから出したん

だしな。まだ出るかもしれないけどな。

「また出すの?大丈夫な訳?」

多分な、それに出すかは未定だし。

「わ~」

「そいへば、なんで名前黎白にしたの?」

なんとなくだよ。ぱつと思いついたんだよ。意味は全くない。

「思い付きね。まあいいわ。それより私達の出番はあるのかしら?」

もううんだ。まあ長く待つてくれ。

「早くするのさね。」

了解了解。

「また、次の更新で会うのさー。」

休み明けの学校はだるす。^{むなず}

「忘れ物ない?」

「ないよ。」

「俺もだ。」

「………忘れ物あつた。枕と布団……。」

「なら、取つてこないと。って、枕と布団なんて何に使うのー?」

「てか枕と布団つてビーナスつけて持つてくんだよ。」

おかしくないだろ。寒い日の朝、しかも休み明けほど眠い時はないだろ。日曜は特に何もなかつたし、ずっと寝ていたから余計に眠たいんだよ。

「だるい、寝たい、サボりたい。」

「駄目だよ、影君。」

「まつたく、影兄は。」

「蒼影は放つておいて早く行こう。せひ」と

酷いな義之。音姉達ももつ行つてゐる。でも本当に日曜日つて面倒だよな。何でなんだろう?

「影兄、早く来てください。遅れますから。」「はいはい。」

文化祭は来週だし、計画の方を急いで準備しないとな。

てかクラスの方よく一週間くらい前まで決めなかつたな。準備とかは料理が出来るやつに料理で、俺と杉並はギャンブル専門かな。杉並ならイカサマ出来るだろうからな。普通にしたら損ができるからな、イカサマは必要だよな。度が過ぎたりしたらヤバいけど。

「おはよう、由夢、音姫先輩、蒼影。」

「おはよう、美夏ちゃん。」

「おはようございます、美夏。」

「おは、美夏。」

「えつと、誰だ?」

あー、義之は原作と違つて面識ないんだつたよな。

「美夏、こつちは義兄です。義兄、こつちは天枷美夏さんです。」

「よひしく、天枷。」

「よろしくな、桜内。蒼影どうかしたのか?」

「眠たいだけだ。」

寒さのせいで余計に眠くな。

「やこえば、由夢ひやんと美夏ちゃんは同じクラスなんだよね？」

「やうだわ、こつも由夢には助けられたいな。」

「私も美夏には助けられますか？」

「やうか。」

由夢は美夏と話していると、義之は無言、音姉は由夢達を見て笑つて
る。

やつまつこつこつのは見て嬉しこな。眠気は取れないにやう。

「よひ、蒼影。」

「恋花さんか。今日も相変わらず元気だな。」

「おこ、蒼影。それって善めののか？」

「当たり前だ。」

「なら、いこたじや。」

「やこえばわ、いつも一緒に来てるの」「今日は鈴花と一緒にじやないんだな。」

鈴花と恋花さんは基本的に一緒に来つたから、違和感あるな。

「ああ、鈴花なら今日は先に行つたぞ。」

「鈴花何かあつたか?」

「準備つて言つてたから、蒼影の計画関係なんじやないか?・クラスなら蒼影も先に行くはずだしな。」

「なるほど、それならあつえるな。」

鈴花にはいろいろ協力してもらつてるし、何かお礼しないとな。

「てか、恋花さんも計画手伝つてくれない?・どうせ設置するだけだし。」

「面白そつだけ止めとくよ。まゆきのやつが怒るだらつかうな。俺も怒つたあいつは苦手なんだからよ。」

「なるほど。」

よく考えたら、俺あの人相手しないといけないんだよな。音姉もいふ訳だし、面倒つたらないな。

「蒼影もあんまやつ過ぎんなよ。一緒にいる俺に被害が来たら困るからな。」

「善処するわ。」

「絶対やつり過ぎるな。」

「さあな、俺先に行くから、音姉達に言つとこてくれ。」

「わかつたよ。」

鈴花が先に行つてゐなら下準備は終わつてゐるだらうし、いひちも絡繹りは完成したから設置場所の近くに隠すだけだな。

ちなみに、今用意した絡繹りは妖怪の姿をした物だ。仕掛けは体に当たると動く仕掛けを組み込んで、それに連動した声が出るようにしている。

一度家で試してみたら、由夢が氣絶した。由夢は昔のかくれんぼの事で、お化けや暗い所が原作より苦手になつたからな。

有り難い事に、由夢は氣絶していいた理由とかは忘れていた。

あれなら、周りがうるさかつたりする文化祭でも十分怖いと思つ。一応忠告は作つておくか。

学園に着くと、ちょうど鈴花がやつて來た。

「蒼影、じょなにつすか。どうしたつすか？」

「鈴花が先に来てるつて聞いてな。順調かなーつてな。」

「もちろんつすよ。蒼影に任せたつすから、完璧にするつすから安心するつす。」

「ありがとな。せうだ文化祭前の土日のどつか街行かねえか？」

「いいんつすか。」

「まあな。お礼も兼ねてな。」

「なら、日曜にするつす。絶対忘れないでくれつすよー。」

「ああ。」

「なら、確認に行くつすから。」

あそこまで喜んでもらえるとはな。ただ、かなりテンション上がりてたみたいだし、日曜は疲れるだらうな。

日曜か……。土曜日よつはいいな。土曜日なら日曜は家で『ロロロロするだらうから、また今日みたいになるからか。

「本当に枕持つてきて寝ようかな……。」

「何言つてゐのよ。」

「ん? ああ、雪月花か。どした?」

「あなたがバカを言つてるから、呆れたのよ。」

「失礼な。」

結構真面目に言つたんだけど。学園の机とか固いから、体が痛くなるんだよな。だから、枕が有つたりよく眠れると思つただけだ。

「蒼影君、義之君は? 今日は一緒にじゃないの?」

「当たり前だ。いつも一緒にいるわけないだろ。まあ、義之ならも

う少しで来るんじゃないかな?」「

「ふーん。なら先に行こひつか。」

「う、うん。」

「そうね、準備もしないといけないから。そいえばナツミが探してたわよ。」

「わかった。教えてくれてありがとな。」

ナツミが俺に用?何かあったか?

「ねえ、蒼影。今回蒼影は料理するの?」

「絶対した方がいいよ。蒼影君の料理美味しかったしね。」

「そうね。」

料理か……。一応作るつもりだったけど、軽くだしな。自分でも一応は自信あるし、ギャンブル用で少し凝った料理作ってみるか?

まあ、今は気が向いたらって事でいいか。

教室着いたし、寝るか。

「気が向いたら考えてみる。少し寝るから後で起こしてくれ。」「

「駄目だよ、ちゃんと授業受けなこと。」

「大丈夫だ小恋。どうせ話し合いだから。」

ヤバいな。もう駄目だ。

「蒼影！起きなさい！」

「ん……、誰だ？」

「あのねえ……、いいから起きなさい……！」

わが二たよ

この声は麻耶だな。さつきは寝ぼけて分からなかつたけど、かなりキレイてるな。多分話し合いが終わつて準備に入るつて所だな。

一
蒼影！！

「わ、悪い……。で、何だ？」

こんな事考へてる場合じゃなかつたな。

「メニューが決まつたから試しに作るのと、トランプの練習よ。ト

「ランプは練習の意味ない氣もあるけど。」

「なるほど。んじゃ俺はトランプにするか。」

「そういうと思つたわ。なら、私達は行くわ。」

「頑張つてな。」

「杉並、涉今大丈夫か？ 麻耶いなこしさ、金賭けてやらないか？」

「ふむ、俺はいいが板橋はビリする？..」

「やるに決まつてんだろ。蒼影から奪いまくつてやる。」

「なら、なにやる？..」

「無難にポーカーでよくね？ 一勝！」と500円でビリだ。..」

「涉金あるのか？」

「今日はな。」

「では決まりだな。桜内は頼むぞ。」

「なんで俺が……。」

そう言いながらもシャツフルをして配る義之。

女子は全員料理に行つたから、邪魔は入らない。今回はイカサマ無しで巻き上げてやる。

「来た来た！！俺は交換無しでいいぜ。」

「つむ、俺もだ。」

二人共交換無しかよ。俺の手札はひとつ……。

ストレートフラッシュだな。9を変えてAが来たらロイヤルか……。

なら……。

「交換だな。」

……、来たな。

「なら、勝負だな。俺はハートでストレートフラッシュだ。」

「マジかよー？俺は9三枚、8一枚でフルハウスだよ……。蒼影は！？」

「俺の勝ちだな。スペードのロイヤルだ。いただきだな。」

その後、十戦して俺は六勝、杉並、涉は一勝ずつで。俺は + 400

0、杉並、涉は - 2000。儲かつたな。

「くつそー、次は負けないからな。」

「おい、涉ー？」

また涉が逃げていったよ。

「俺も鍛えておくか。」

……杉並も消えたな。

「何だつたんだ。」

「さあな、それより儲かつたな。」

「涉泣いてたな。まあ、自業自得っぽいんだけじな。」

「まあいつもの事だ。それより女子そろそろ帰つてくれるんじやないか?作るもの軽い物だしさ。」

「かもな。蒼影も作るんだよな。」

「あ?そんな事言つてないけど。」

「でも委員長が言つてたぞ。」

「俺が寝ていたからか…………。まあ、やうつかなとせ思つていたけど…………。」

「ただいまー、ね、蒼影。ボクの料理食べてみて！」

「フィルか……、なら一つもうつな。つばぐ。美味しいと思つた。」

「本当ー? やつたー。」

なんかフィルを見るの久しぶりの様な気がするな。学園で会つても、登下校とかあまり会わなかつたからかな?

「蒼影、私のもいいかしら?」

「ほたんか? 別にいいけど……。」

「ほたんつて料理出来たつけな?」

「うん、不味くはないってか美味しい方だな。

「普通に美味しいぞ。」

「そりゃ、よかつたわ。」

「フィル達だけずる」のセー!ナッシ!のも食べるのセー!」

「分かつてるから、落ち着け。」

「分かつたのや……。」

三人共結構料理出来るんだな。

簡単な料理だからかも知れないけど、どれも美味しいな。

「美味しいぞ、ナツミ。三人共ありがとうな。」

「よかつたのやー。」

「ねえ、蒼影。蒼影は料理しなくてもいいの？」

「大丈夫だろ。大体なら作れるしな。てか雪月花や麻耶は？」

「みんななら、もう少し時間が掛かるって言ってたよ。」

「ふーん。そいえばナツミ俺に何か用あるんだって？」

「そりだつたのさー生徒会に行くのさー。」

「なんて……？」

頼む聞き間違いであつてくれ。

「だーかーら、生徒会に行くのさー。」

……。今は一番会いたくなかったのに。私生活ならまだしも、学園で会つたら計画バレそうだしな。

しかも、今ちょうど仕上げだし……。一応鈴花を連れて行くか。俺はバレてるけど鈴花はバレていないから、鈴花に頼んだらバレそうになつても誤魔化せそうだじ。

「蒼影、あたしもついて行くつす。いいつすか、ナツミ?。」

「ちがうさんの方へ」

「じゃ、これ終わったら行くか。」

でも、ナツミが生徒会に何の用なんだ？

休み明けの学校はだるすき（後書き）

「天枷 美夏だ、よろしくな。」

「沢井 麻耶よ。」

「毎回思つたが、初めの皿口紹介はいのだらうか。」

一応後書き初登場はしてもうおつかとな。まあ、誰が出たか忘れた
らまたさせんかもな。

「ちゃんと覚えておきなさいよ。」

「麻耶の言つ通りだぞ。」

出来るだけな。それより、次からの更新は一日に一回じゃなくなる
かもしれないから。

「どうしてたのだ？」

いろいろ忙しくなつてな。出来るだけな同じペースにするけど、遅
くなる事もある。

だから、この場で報告をな。

「そりが、黎白も大変なのだな。」

「サボつてただけじゃないの？」

…………。他の人の小説面白いよな。

「はあ…………。」

「まつたく黎白は。美夏は帰るべ。」

「私も帰るわ。」

「了解。また呼ぶから。」

じゃあ、次の更新で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262y/>

転生して異世界廻り～D.C.?編～

2011年11月24日18時48分発行